

東京大学大学院新領域創成科学研究科
環境学専攻社会文化環境コース

平成 17 年度

修士論文

新潟県における縄文時代中期末葉から
後期初頭にかけての生業行動

2006 年 1 月提出

指導教員 佐藤 宏之 助教授

36741 増田 洋基

目次

はじめに	3 p
、当該期の様相と問題点の所在	
1、時間的石器組成	4 p
2、空間的石器組成	6 p
3、ブロック（県中央部・信濃川水系流域）における特色	8 p
、特殊性ある石器の分析	
1、板状石器と三脚石器の関係性	9 p
2、板状石器出土遺跡の分布	12 p
3、板状石器と礫石錘の関係性	13 p
4、新潟県中央部での漁撈活動	14 p
、モデルの適用による考察	
1、民俗例からの行動パターンの抽出	16 p
2、内水面漁撈活動への民俗事例からのモデルの適用	18 p
3、板状石器への民俗事例からのモデルの適用と問題点	20 p
4、ブロックの生業行動についての結論	21 p
結論 中期末葉から後期初頭にかけての生業行動の変化から	22 p
註	23 p
引用・参考文献	24 p

はじめに

縄文時代中期に爛熟した中部・甲信越地方の縄文文化は一転、中期末葉から『壊滅的』と称される転機を迎えるとされる。それまで巨大な環状集落や遺物を数多く残し、最も繁栄したとされた社会は急速に痕跡を薄くする。中心地とも言えた長野県内の遺跡数は落下と呼ぶに相応しい下降線を辿り、以後減少の一步をたどっていく。この現象は中期末葉から後期初頭にかけての当時に起きたと考えられている気候の冷涼化・湿潤化に関係しているとされてきた。

従来主張されているのは、気候変動に伴う食料基盤の崩壊に伴う社会の縮小である。中部山岳地方の繁栄を、自然生態系が許容する人口数の限界であったとして、短期的な食糧事情の悪化に耐えきれなかったとする(安田 1980)。小山修三氏が「日本庭園」での団栗の生産量を調査して、天候不良が非常に影響を与えると明らかにしている事などを上げ(小山 1984)、堅果類をメジャーフードとして集約的に利用していたと想定される事より、遺跡数の減少を直接的に人口数の激減と解釈している。

一方、遺跡数の減少をそのまま直接に人口と対比しないとする説もある。縄文後期以降に現著になる墓域遺跡や巨大なモニュメント類から、建築に要したであろう労働力の大きさを見取って、縄文人が取った行動戦略が変化したことによって空間の利用もまた異なった結果として、遺跡の検出数が少なくなった(山田 2000)とする説等もある。事実、後期に入り遺跡立地は大きく変化しており、台地上から低地への展開、河川や谷部などの積極的な開発が行なわれていたと評価されている。辻誠一郎氏が指摘する、縄文時代後期の海退期に低地では森林が繁殖し、その新たな環境へ人類が進出していったとする可能性も高いと考えられている(辻 1996)。

中期末葉から後期初頭という移行期に、環境が冷涼化・湿潤化したのはある程度理化学的に明らかになっている。鳥取県東郷池の年縞の分析結果や尾瀬ヶ原の分析結果などや花粉分析の積み重ねから、特に日本海側の冷涼・湿潤化が指摘されている。人類による環境への適応行動上、当時に何かしらのアクションがあって然るべきであろうし、多くの点が指摘されている。例としてセトルメント・パターン等狩猟採集民の行動原理に重要な位置を占める貯蔵について変化が見られる。中期末から後期初頭を境に東北地方北部を除いて貯蔵穴の容量が減少、形態もフラスコ状から袋状へと変容する。それらが何を意味するのか。適応戦略の評価をもって遺跡数の現象等『中期文化の崩壊』を解釈しなければならぬと思われる。

さて、中部・甲信越に現著であるこれら遺跡数の大減少であるが、その範囲でも地域差が無いわけではない。富山県内では沿岸部で中期から後期初頭へ継続して営まれる遺跡のケースが多く報告されている。新潟県内では山間部においても、中期末葉から後期初頭の移行期に存続性を有する遺跡が寧ろ一般的であるとまでされる現状がある。この様に一部には、寒冷湿潤化の時期に遺跡の規模・数が大きく縮小するという大局的な現象にそぐわ

ない場合も認められる。これらは当該期の異変に対して、非常に示唆的だと推測される。遺跡の多くが姿を消す中で営まれ続けられた要因を探る事は、恐らく起きていただろう気候変化への適応行動の一端を明らかにする事と同義でもあるからである。

富山県での沿岸部においては、海産資源の積極的開発が原因であろうと見込まれている。また縄文時代後期における低地への進出、そこでの石鏃類の卓越は房総半島や離島において類似のケースがある。一方、新潟県内での山間部における中期からの遺跡残存性については、管見では未だこれといった説や考察はない。本論では山間部という中期に繁栄した土地条件を意識して、新潟県内に着目した。

、当該期の様相と問題点の所在

1、時間的石器組成

まず最初に、遺跡の大減少が起きたと考えられる縄文時代中期末葉から後期初頭にかけて、当時の行動戦略に変容はあったのか。またどういった性質の変化だったのかを大局的に確かめた。採用したのは羽生淳子氏が用いたクラスター分析による手法である（羽生1990）。まず中期末葉と後期初頭に時期を二分し、生業に関する第一の道具である遺跡毎の石器組成の構成間に認められる統計的な距離を以って、生業行動の相似或いは相違を抽出した。縄文時代の石器は時代を通じて製作技術や形式が安定しており、新潟県内でも当該時期に初めて登場したような器種は存在しておらず、共通の要素で比較可能である。

設定範囲は新潟県内と基本的に限定しながらも、土器様式の広がりという一種の文化的領域を無視できないため、編年上後期初頭とされる三十稲場式から南三十稲場式土器を主体的に出土する空間と定めた。これらの土器の分布域は、ほぼ新潟県内及び近辺に限定される。この空間内で中期末葉に位置する大木9式から大木10式期を 期、三十稲場式から南三十稲場式期を 期と設定した。

分析に用いた資料として石器器種は主な石器13種とし、それらが最低でも20点以上石器を出土する遺跡を使用した。石器組成の比較であるので、数値としては実数ではなく、百分率に直したものを利用した。また当然ながら時期が特定されているという蓋然性が高いものを選んだ。その判断基準は単一時期の土器しか出土しない場合、層位・出土地点・遺構などから時期が判別し得る場合、当該時期の土器の出土が著しく、それをもって当該時期の遺跡だと認知しされている場合である。羽生淳子氏の基準では住居址の数等も考慮されているが、今回の目的はセトルメント・パターンの考察ではなく、より広い意味で生業行動のバリエーションを確認する事である為に除外した。結果的に用いた資料の総数は60遺跡である。クラスター分析に使用した距離はユークリッド平方距離、算出方法は平均連結法に拠った。

分析の結果は図、1の通りである。クラスターは以下のように分類した（図、2）。まず

A類とした非常に類似するパターンのクラスターであるが、これらは全て磨石類を最も大量に有している。A2類は打製石斧にもピークを持っており、A3類は石鏃と磨石類に比重がある。A4類は磨製石斧と石皿が磨石類に肩を並べる程となっている。磨石類は基本的に食料を粉末状に加工するのに供されたと考えられている。土掘り具として採集の道具とされる打製石斧や、基本的に磨石とセットである石皿が共に多く出土する場合については、食料資源への傾斜が覗えるだろう。

B類としたパターンは石鏃類または搔器・削器類を主体的に持つ。構成する遺跡がどれも石皿を殆ど持ち得ていない点にも特徴がある。C類は二分されており、C1類は打製石斧単体で構成されるような場合であり、C2類はクラスター内で一貫した傾向はなく、個々の独自性が高い集団である。二、三の器種にピークを現している。D類以降は独自性がより高く、何らかの器種にピークを持つクラスターとしかできない。

更にこれらのクラスター群を時期別に二分した(図、3)。クラスターの種別としては時期間に差異は無く、共通している。しかし 期ではA2類が最も多く見られ、独自性の高いクラスターになる程数を減らしていく。 期は逆の傾向であり、C2類が最も確認されており、 期で主流であったA類ではA3類を除いて数を減らしている。つまり 期から 期にかけて、石器組成のパターンは多岐化した事になる。石器の種別という観点から見れば、磨石類を中心とする場合が減少する代わりに、A3類・B類の増加から石鏃類を中心とした場合が増加してもいる。

ただ以上のクラスターが直接的に行動戦略を示唆する訳ではない。例として、A4類を構成する二つの遺跡、岩之原中期遺跡と多賀屋敷遺跡では性質が異なると考えられる。両者は群集性土坑を有する遺跡であるが、後者は住居址を存在しておらず、小林達雄の唱える類型で言えばA類となる(小林 1976)。一方前者は広場を持つ拠点的な集落であり、これらのクラスター或いは石器組成が同様であるからといって、すぐさま類似した行動パターンが採られていたとは断定できない点に留意する必要がある。飽く迄一側面からの分析であると踏まえておくべきであるものの、中期末葉から後期初頭という移行期にかけての一つの傾向としては意味があろう。

その抽出した傾向である後期初頭の石器組成の多岐化は、羽生淳子の予測表(羽生 2000)に従えば、コレクター・システム色を強めた事を示唆する(*1)。羽生に抛ればフォレイジャー・季節的定住のコレクター・通年定住のコレクターと、定住度の強弱によって遺跡間に見られる石器組成の多様性、遺跡規模の多様性、遺跡分布に差異が生じるという。フォレイジャーは通常、資源分布が季節的・地域的に均一な条件下で採られる戦略であるので、遺跡間の石器組成も類似度が高く、遺跡もまた均等に分散する。規模にも差異は小さいだろうと予測される。季節的定住のコレクターは季節的に偏在する食料資源の開発の為に、離散集合を特徴とする季節的移動を戦略として採用する。したがって遺跡ごとにその機能が異なり、石器組成及び規模にも多様なバリエーションが生まれる。通年定住のコレクターの場合は、年間を通じて同じレジデンシャルベースで生活が営まれる為に、遺跡間の石

器組成及び遺跡規模の多様性は相対的に低いと予想されている。コレクター・システムに共通するのは、資源分布の偏りから、遺跡分布も特定の場所に集中すると推定される点である。

これらに従えば、期から期にかけての石器組成の多岐化は、季節的コレクター・システムの強化、進展と解釈される。中期から後期への移行期に際して、資源の分布がより偏在的になったと推定される。この結果は縄文時代後期に一般的に見受けられる傾向、遺跡が有する機能の特化傾向と一致する。新潟県でも気候の寒冷化が見込まれている中期末葉から後期初頭にかけて、行動戦略が多様化・多岐化した事を物語っている。

2、空間的石器組成

中期末葉(大木9式~10式期)から後期初頭(三十稲場式~南三十稲場式)にかけて、大雑把ながら遺跡間の石器組成における差異について分析を行なった結果、クラスターが多岐化し、遺跡間分業が多様化する傾向は抽出できた。ただこの分析では、時間的遷移を第一義とした為、地域的特色を抽出できていない。石器組成は周囲の環境への適応行動の所産でもあるため、地域色を色濃く反映するものでもある。資源分布に一層の偏在化が生じた為に石器組成が多岐化したのならば、空間的な分析も当然多様化が確認できる筈である。

新潟県下の地域性を導き出した石器組成の集成は数多く存在する(鈴木1990、1996、1999前田2000など)。鈴木俊成氏は石鏃・尖頭器・石錘を狩猟具、打製石斧・磨製石斧・石錐・箆状石器・三脚石器・板状石器を採集・加工具、磨石類・石皿・石匙を調理具と仮定して、縄文時代中期を中心に分類した。結果として当該県下は4ブロックに別れるとして、佐渡・新潟平野における石鏃の頻出と打製石斧の欠如や新潟県西部及び北部の調理具の優先、中央部山間地帯の採取具から調理具への、主たる組成パターンの変遷を見出している。

前田精明氏は更に主たる生業に関ると考えられる石器器種を限定し、石鏃・石錘・打製石斧・磨石類の4器種によって地域区分を読み取ろうと試みている。鈴木氏が区分した4ブロックを細分する結果となっており、石錘に着目した点が興味深いものの、やはり基本的な地域性は佐渡・新潟平野、阿賀川以北の県北部、県西部、県中央部(信濃川水系)の4分類に納まるようである(図4及び5)。

本稿が問題にする時期に限定してみれば、以下のようなになる。まず石器出土数が50点以上であり、比較的調査が行き届いた遺跡を抽出して、その石器組成を地図上に落とした。結果は上記と同様に4ブロックに区別された。その上で各地域において、新要素として現われた現象が幾つか存在する。

まずブロック(佐渡・新潟平野)では伝統的に石鏃の頻出と打製石斧の不在とまでしていい程の少数性が認められる。後期に入ってもその傾向は変わらず、後期初頭には遺跡数が寧ろ増大する傾向がある。一部では大規模集落を形成するとされる(巻町教育委員会

1994)。縄文時代後期に普遍的な人類の低地平野への進出(辻 1996)によると考えられ、石鏃への傾倒も離島や半島において事例があるものである。一例として角麗山塊においては、中期と後期の間に遺跡数の際は殆どなく、後期初頭には寧ろ増加する事が確認されている。

ブロック(阿賀川以北)では特色として打製石斧の希少さが上げられる。主体を占めるのは磨石類であるが、ブロックと比較して緩やかながら石鏃の増加傾向が見うけられる。後期初頭以降になると、磨石類以上に出土するようになる。石器組成上では磨製石斧の数量を大量に示す遺跡があり、理由は輝緑石 玄武岩系石材を利用した磨製石斧生産が盛んに行われる為である。阿賀川以北では、中期中葉に加治川流域で上車野E遺跡から開始されたと考えられている大形磨製石斧生産であるが、中期後葉には狐森A遺跡でしか検出されていなかったが、後期に入って活発化する。まず三面川流域でアチャ平上段遺跡や元屋敷下段遺跡などで、前者で約二千点、後期で一万点という未製品が検出される程になる。加治川流域では後期後葉から生産活動が強化される(関 1997)。

ブロック(新潟県西部)においては、打製石斧の減少と石鏃の急増傾向になる。磨製石斧生産という点においてブロックと共通している。硬石・蛇紋岩の産出を利用した玉類・磨製石斧の生産が主である地域とされている(鈴木 1996)。後期初頭には玉類の生産活動の痕跡は明確に確認できなくなるも、磨製石斧生産は阿賀川以北同様、積極性を増す。

ブロックの磨製石斧生産は調和的であり、蛇紋岩製の流入はブロックにおいて中期後葉から減少し、また後期以降ブロックでは小型磨製石斧の生産が主流になると指摘されており、新潟県全域で検出されている(高橋 1999)。

ブロック(新潟県中央山間部・信濃川水系流域)では、上記三地域とはやや様相が異なるらしい現状がある。早期より石器組成上、卓越した打製石斧の占有があった地域である。中期から後期への移行期を跨いで、緩やかに石鏃へ主たる生産具が移行するのではあるが、他地方と違い暫らくは磨石類が優越し、打製石斧も減少しながらもある程度の割合を保ち続ける。一見中期山間部的な行動を維持し続ける模様であるが、中期末葉から後期初頭の移行期にかけて、石器組成のパターンに多種多様さがある。

、ブロックの磨製石斧生産が環境適応という側面において、どう位置付けられるか議論があると思われるが、気候の寒冷・乾燥化が原因とされる針葉樹林の増加や、自家生産を遥かに超える生産規模から推定される交易活動の存在より、環境と無関係な行動とは考えにくい。加治川流域では剥片素材となる石材が希少であり、外部からの入手に頼りながらも磨製石斧生産のみに適したとさえ表現出来る石材環境を保持し続けた点からは、当行動が少なくない意義を有していたと想定出来る。

だが本論の主題上、まず問題にしなければならないのはブロックに置ける石器組成上に見られる変化の特質だろう。従来唱えられているような当該期に置ける気候悪化、それに伴う壊滅的とされる中部地域の遺跡数の減少という状況下で、羽黒遺跡、城之腰遺跡、中道遺跡、八反田遺跡(後期)における石器組成のバリエーションは一見、新たな行動パ

ターンを模索している様にも思える。であるのに結果として縄文時代後期の石器組成では磨石類の優越、打製石斧における一定の残存、石鏃の増加にある緩慢さといった中期山間部的な色彩が濃く保たれる。この現象は何を示唆するのだろうか。

石器組成論に問題は多いが、今回は人間の活動は決して集落内では完結せず、また組成論に使用できるような大規模遺跡だけが生業の中心ではない点を上げたい。季節的移動による集落の分散や、夏・冬集落といった区分などが推測される以上、比重の大きかった行動とそれに伴う石器が検出され難いケースも考えうるだろう。このような可能性がブロックにも当て嵌り得る点を考慮して、以下より当地域に焦点を当てていきたい。

3、 ブロック（県中央部・信濃川水系流域）における特色

地域的石器組成では、縄文時代中期から後期にかけて、緩やかな打製石斧の減少・石鏃の微増という傾向があった。石鏃が先行する芹沢遺跡、打製石斧が変わらず優位性を保つ山間部の八反田遺跡、柳古新田下原A遺跡など、細かく見れば複雑な様相を呈するが、全体的傾向としてはやはり中期的色彩を継承しているとしていいとされている（鈴木 1999）。

だが遺跡数の増減を確認してみると、石器組成の変遷にある緩やかさとは異なる状況があった。図、6は津南町・中里町を範囲とした大木7式～瘤付土器期間における、周知確認された遺跡数である（佐藤・宮田 2000）。津南町は国営農地再編パイロット事業の本格化により、丁寧な試掘調査等が行なわれており、遺跡分布調査の精度が高いと判断されるので例示した。ピーク時である大木8式期から中期末、大木10式期には実に四分の一以下にまで遺跡数が激減している。後期初頭の三十稲場式期、瘤付土器1期にはやや盛り返すものの、以後この地区では減少の一途を辿る。

中期末からの遺跡激減現象は中部・北陸において一般的な傾向である。やや特異なのは山間部であるにも関わらず、後期初頭に小規模ながら遺跡数が増える点であろう。遺跡数が直接社会規模を示すかどうか一定の疑念が上げられているが（山田 2000 など）当時における遺跡単位での活動痕跡が縮小化しているのは間違いないと思われる。ブロックも遺跡数の壊滅的とも喩えられる減少を迎えているには違いなく、その原因の一環が従来仮説されているような気候悪化にあるとすれば、先述の後期石器組成が示すような中期的色彩は矛盾しているようにも思われる。また新潟県の遺跡において特徴的な点に、中期末から後期への移行期を跨いで、大規模遺跡が存続する傾向がある。規模自体は遺跡数の増減に合わせるように、大木8式期・9式期をピークとして以後衰退する。（石坂 1999）例として長岡市岩野原中期遺跡、同市中道遺跡、塩沢町原遺跡、十日町笹山遺跡などが上げられる。いずれも後期前葉まで継続し、以降も集落として成立していくものもある。中部・北陸地方ではこのような存続の仕方は珍しく、中期末葉で途切れる場合が殆どであるという。

中期前葉から後期後葉にまで視野を広げて、ブロックの石器組成及び器種を調べた際、

奇妙な石器が存在する事が解る。板状石器と呼ばれる剥片石器である。縄文時代中期中葉の五丁歩遺跡、清水上遺跡から現れているもので、限定的に一部遺跡（五丁歩遺跡・清水上遺跡・長岡市岩野原遺跡）では石器組成上でも一定割合を占めており、当該地域内に散見されている（図 8）。

板状石器とは「薄い板状剥片、あるいは平坦な自然石を用い、その周辺に加剥して、円形または楕円形に作出した石器である。周辺加工は一面から切り立つように剥離を加えているので、断面形は台形をなす。片刃状の周辺端は鋭い刃状を呈する」（中村 1961）と紹介される物である。高橋氏によると、円盤状石製品や磨製板状石製品など類似する形状のものはあれど、板状石器は新潟県信濃川中・上流域に固有に出土する石器である（同氏 1992）。詳細は後述するとして、当石器は石器組成上、前述した三遺跡の例外を除いて左程大きく割合を占めない。長岡市中道遺跡では 0.66%（実数 55 点）程度である。また数点という組成的に無視しうる場合も多々あり、ブロックという比較的狭い空間において、出土数の差異が非常に激しい状態にある。

ブロックでは新潟県内でも特色ある石器を有する地域としても知られており、片刃状打製石斧や彫刻石皿等（*2）が上げられる。板状石器もその一つであり、縄文晩期の長岡市藤橋遺跡にまで現れ続ける。また出土のパターンにも一点、興味深いものがある。比較的調査が行き届いた遺跡では、三脚石器とあたかもセット関係にあるような様相である。三脚石器は単独でも出土するが、板状石器は三脚石器と必ずとしていい程、同じ遺跡から検出されている（図 11）。数量的にはやはりばらつきがあるが、三脚石器出土数 < 板状石器出土数となっており、両石器間に関係性を疑わせる。

新潟県下における遺跡の、移行期を跨いだ存続は ~ ブロックにおいてはマクロな推測が成り立つ。後期に至り現われた新しい行動は、実の所中期に確認されたそれを強化した側面を有している。ブロックでは伝統的に石鏃を大量保有し、また低地・砂丘上へ適応していた。ブロックについてクローズアップされる磨製石斧生産の活発化は、特にブロックで中期からの流れを汲むものである。

同じようにブロックにおいても、遺跡存続の特殊性が中期的行動による可能性があろう。後期に入って新出の、或いは目覚しく強化された行動が確認されない理由が石器組成論の限界と死角にあるのなら、上記のような事情にある板状石器の存在は一考に値し得るのではないか。本論はまずこの石器を探る事で、信濃川中・上流域における中期末葉から後期初頭という移行期、適応戦略行動の変化と内容を確認していきたい。

、特殊性ある石器の分析

1、板状石器と三脚石器の関係性

まず石器の定義を明らかにする。三脚石器は八幡一郎氏によって「特徴は三脚あり、背面

が内湾していることである」とされ、命名された石器である（八幡 1932）。平面形態が三角形、或いは三辺に挟りがある三角形（以下挾状三角形）であり、側縁に鈍い刃部を有する。両面加工が施されており、裏面の様子は平坦ではなく凹状がやや多い傾向。断面は不整形のものを指す。富山県以北日本海側の遺跡で散見されるものであるが、例外的に関東地方でも出土する場合がある。以下では典型的な三脚石器、挾状三角形を呈する厚手のものをA類、形状はそのままに薄手状のそれをA類、挟りがない物をB類とする。

一方板状石器は中村氏の定義を基本に、平面形態が三角形・挾状三角形のものがある。刃部に使用痕が存在しているという報告があり、利器と推定される点から類似とされる円盤状石製品や磨製板状石製品とは区別した。これらの石器は全体に研磨が施されており、機能が異なる可能性がある為である。形態に対する分類は清水上遺跡（鈴木 1990）を基本的に基準としつつ、以下の様に設定した（図 10）。平面の形状が分類基準となっており、挾状三角形をA類、三角形をB類、円形状をC類、不定形状をD類、半円形状に弦部に挟りがあるものをE類とした。D類に付いては半円形状をD1類、四角形状をD2類と細分しているが、判別がつかかねる物が大変多いので、便宜的な処置である。D類は基本的に不定形なもの扱う。

両石器は清水上遺跡の資料により、縄文時代中期初頭には出現した事が明らかになっており、また非常に類似する石器である。三脚石器と板状石器を比較した場合、特に挾状三角形・三角形の物であると、殆ど差異がなく、分類が困難ですらある。唯一の分類基準としては前者が両面加工、後者が片面加工を施されている点である。以下より、三脚石器において最多の出土数を誇る清水上遺跡の資料を中心に各属性を比較していく。三脚石器では長さ2.5～8cm、幅3～9cmに分布する。A類には10cm以上の大型品が存在する以外に類による偏りは見受けられない。厚さの点ではA1類とA2類・B類に差異が大きい。前者は1.5～3cm強に収まり、後者は0.8～2cmの幅を取り、1.5cmの物が最も多い。

板状石器では長さ2.5～6cm、幅3～7cm強のサイズに収まる。厚みは0.5～2cm弱の内にあり、1cm前後に分布するものが主流である。両器種間で類似する三脚石器A2・B類と板状石器A・B類を比較するなら、板状石器がより薄く、規格性も強いようである。これらの数値については、清水上・五丁歩・中江聖之宮・城之腰・中道・北野B・アチャ平上段・元屋敷下段の資料から、ほぼ同じ数値を採り続ける。

用いられている石材は三脚石器A1類を除いて、粘板岩や結晶片岩など、薄く板状剥片が採れるものを中心に選択している。現地周辺で採集できるもので、石材環境の豊富さから、制限あつての選択ではないと考えられる。チャートや硬質頁岩、圭質頁岩等はあまり使用されていない。例外的に主たる利用石材が頁岩である遺跡（林中遺跡、城之腰遺跡、岩之原遺跡等）もある。

各石器に供される素材の形状においては、三脚石器では主要剥離面が曲線を描くもの、板状石器では扁平な自然礫をも素材するが、「主要剥離面が節理面あるいは平坦状の剥片」を使用する点が共通する。

使用痕の位置も共通する。側縁刃部に磨耗・つぶれが、裏面に磨耗・擦痕が発見されている。各使用痕は同一個体に複合して見られており、両石器又は分類別において現著な差異はない。

また三脚石器を最も数多く出土した清水上遺跡によれば、廃棄されたと考えられる出土パターンも同様としていい(*3)。

しかし分類上には出現当初から地理的・時期的な変化があった。遺跡毎の分類別個数の内分けの変遷は以下となっている。清水上遺跡では三脚石器と類似した分類である、板状石器A類及びB類が併せて全体の四分の三以上を占める。一方、三脚石器もA2類とB類が大半である。五丁歩遺跡では板状石器C類及びD類が主体となっており、A類は存在すらせずにBも少数派に留まっている。三脚石器の保有量も、五丁歩遺跡では三点という非常に少数である。ブロック内ではないが、中期前半に両石器を出土する福島県中江聖之宮遺跡(大木7a式新相期)ではC類が単体で過半数を占めるなど、C類及びD類が主であるが、E類を除いた全分類形式が存在している(図7)。この差異は何処から生じるのだろうか。

石器の観察から、三脚石器A2類・B類と板状石器A類・B類の類似性は明確である。使用痕の生じている部位も、頻度は兎も角として共通しており、以上からは両石器が同様の機能を有していたと推測可能である。両石器のセット関係の理由と考えられるも、五丁歩遺跡では板状石器が単独で存在しているかのような、三脚石器の少数性がある。とはいえ、当該遺跡で両石器間に関係が全くなかった訳ではない。E類という五丁歩遺跡でのみ確認される、弧を描く刃部に抉りが設けられる形態は、三脚石器からの影響としていいと思考する。

いわば清水上遺跡と五丁歩遺跡の分類上の差異は三脚石器と板状石器の影響度、親和性の差にあるのだろう。中江聖之宮遺跡での現れ方は以降の普遍的なものである。C類が板状石器の主体的分類形式となる。しかし平面形状は漸移的であり、判別が困難な場合も多い。

次に両石器のセット関係について考察する。三脚石器がA1類・A2類が基本的に板状石器に付属する形に出土する様相を呈する(図9)。両者のセット関係は三脚石器が姿を消す後期初頭まで続く。具体的には城之腰遺跡や中道遺跡など、中期末葉から続く遺跡まで両石器は伴出し、岩野原遺跡以降になると板状石器は単体で出土する。

少数の三脚石器 多数の板状石器というセット関係はどう説明すべきか。三脚石器は東日本で散見される点、板状石器は新潟中央部信濃川水系流域に限定される事実から、板状石器は三脚石器を当該地域固有の理由により特殊化し、規格化した物質文化だと考えられる。それでも縄文中期にはセット関係にあったのは、機能の対象が異なった為だろうか。五丁歩遺跡出土の資料などでは、帽子型を成す刃部を持つ板状石器が散見される(図12)。刃部再生の微調整剥離痕など板状石器の方が比較的『刃』としての機能を強く有している模様である。

後期に至っては三脚石器自体の消滅、板状石器のみの出土となるので、最終的には三脚石器が有していた機能を板状石器が代替したものと推定する。従来は宗教的用途と推定されていた三脚石器であるが、清水上遺跡の資料によって使用痕が確認された事によって、刃部を利用した加工具であると判明している。両石器共に裏面での磨耗或いは擦痕の現著さから何かを削り取った工具ではあるだろう。板状石器の使用痕分析としては、高倍率による顕微鏡観察は行なわれておらず、肉眼及びルーペでの観察になるが、「五丁歩遺跡のそれは裏面の平坦面を主に使用する結果が得られ」（沢田 1997）ており、清水上遺跡では石器縁辺部に磨耗があるのが一般的とされている（寺崎 1996）。しかしながらどちらかの痕跡しかないという訳ではなく、裏面の擦痕と石器縁辺の刃部に残る剥離痕・つぶれは同一固体に共存しているのは前述した。推定される機能としては『擦る』・『削る』などの行動がある。作業の対象物は明らかではないが、石器素材の柔らかい硬度からは骨角や石には不都合であり、植物加工が候補として上げられている。

現状、石器自体からではこれ以上判明する物はないと思われる。中範囲理論、取り分け民族考古学的モデルの適用が必須だろう。その為にはまず対象たる当石器についての環境的条件を絞っていく必要がある。類似する石器であるという理由のみでの、他時代他地域からの民俗例の援用には意味がなく、対象を取り巻く環境や生業等の構造について同義性が求められるからである。

2、板状石器出土遺跡の分布

次に板状石器を有する遺跡の地理的分布を、時系列に沿って見ていく（図 13）。地図上に記した遺跡の基準は当該石器を出土した事を最優先としており、表採資料のみの場所も含んでいる。

地理上、当該石器保有遺跡は時代を通じて大半が信濃川水系と近接するロケーションにあり、大量保有する遺跡は全てが河川とほど近い場所に存在する。中期初頭に清水上遺跡、五丁歩遺跡で出現して以降、中期前半期においては魚野川上流に集中する。後半期には十二ヶ所確認され、長岡市信濃川中流域までに散見する。後期に入ればやや出土遺跡数は増加して、十五ヶ所となる。信濃川上流から中流域にやや偏った分布だが、調査上の粗密が原因である可能性が高い。阿賀川流域の北平B遺跡や三面川流域のアチャ平上段遺跡など、

ブロック外にも板状石器を出土する遺跡が現れる。比較的多数の出土数を誇る遺跡は後期以降、中流域に現れる（岩野原後期集落遺跡や藤橋遺跡、三十稲場遺跡）。後期後半になると出土遺跡は激減する。これは当該地域の遺跡数の減少にも原因があると思われるが、大量に保有していたと推定できる遺跡は岩野原後期集落のみとなる。晩期に至っては藤橋遺跡のみにしか板状石器は確認されない。

板状石器は出現後、ほぼ間を置かずにブロック内に広まった様相が浮かんでくる。中期前半こそ魚野川方面にやや集中傾向があるのみで、以後は均等な分布を示すと考えられ

る。特徴として上げるのなら、遺跡数が減少する後期に至って、出土箇所が微増する点だろうか。後期前半期の遺跡は十五点中七遺跡が中期より継続した遺跡であり、城之腰遺跡や中道遺跡などは中期末葉から板状石器の所有を開始している。この傾向は示唆的であるだろう。津南町・中里町の資料で提示した様に、縄文中期から後期への移行に際しての壊滅的な減少現象を念頭に置いた時、板状石器を所有した遺跡の存続性の高さが目立つ。また新潟県内における大規模集落の、当該移行期における継続性とも符合する。

板状石器を有する遺跡の石器組成、中期と後期を比べて一面において正反対の様相を呈する。縄文時代中期末～後期に板状石器を大量に有する遺跡は、同時に多数の礫石錘を輩出している。一方、中期末葉以前においてはそうではない。むしろ排他性を有しているかのように、全く石錘を出土しない。新潟県内の事例では、土器片錘等が皆無としていい程の状況から、礫石錘は漁撈用と仮定されている。

次にブロック内の中期に限定した遺跡分布を図示した(図 14)。全ての遺跡が同時に展開していた訳ではないものの、現在確認されている環状・大規模集落の立地は各支流の河岸段丘上に存在していた可能性が高く、距離にしてほぼ4 km間隔になると推定され、河川管理を疑わせるという(高橋 1992)。白抜きのドットが多量の石錘を有する遺跡である。板上石器を多量に有する遺跡も、ブロック内の、河岸段丘上に位置する大規模集落となっている。立地上は漁撈活動に適していると考えられ、現に中期末葉からは城之腰遺跡・中道遺跡では板状石器と共に礫石錘を有するようになる。また清水上遺跡では縄文時代前期前半の包含層から石器上、小規模ながら漁撈活動の痕跡が認められる。五丁歩遺跡では数十メートルという近接距離にある原遺跡で、現著な礫石錘の出土があった。

3、板状石器と礫石錘の関係性

両石器の、遺跡による出土様相を整理すると以下ようになる(図 15)。

まず中期初頭～後葉以前において、両石器を同時に保有する例は存在しないとしていい。どちらかを多量に出土する場合、片方は存在しない、もしくは非常に少数しか検出されてはいない。板状石器を持つ遺跡をA、礫石錘を抱える遺跡をBとすると、A及びBは基本的に類似した立地等環境条件下にある。この時期においてAは清水上遺跡・五丁歩遺跡の二遺跡に該当する。Bには野首・城倉・小坂遺跡の四遺跡が当て嵌まる(*4)。B遺跡の石器組成のパターンは類似している。つまり、ブロックに基本的な磨石類と打製石斧が優越する、縄文時代中期における普遍的な山間地的色彩である。石錘を多く有するからといって、漁撈活動を生業の主体にしていた、と表面上は捉えられない。Aに適合する二遺跡においてもその点は変わらない。両石器は副次的な位置付けにある。

中期末葉～後期全般にかけては、両石器は同一遺跡に共存する。中期末葉の城之腰遺跡では板状石器16点(約0.2%)、三脚石器11点(約0.1%)、石錘688点(約10.8%)が検出されている。軽石の浮子や切目・有溝錘がブロックで最初に登場してもおり、漁撈活

動への傾斜・活発化が指摘されている。同時期中道遺跡では板状石器 25 点 (0.66%)、三脚石器 3 点、石錘 245 点 (6.44%) となる。岩野原後期集落遺跡では板状石器を 500 点以上、石錘を 400 点以上が確認されており、三脚石器は全国的に姿を消す。三十稲場遺跡では両石器共に 200 点以上が報告されている。当期においては両石器を同時に多数所有していく傾向がある。ブロック外でも同様の現象が、北野 B 上層遺跡・アチャ平上段遺跡・元屋敷下段遺跡で見受けられる。

晩期唯一の藤橋遺跡では板状石器 55 点に対して石錘 4 点と、両石器の数値上での結びつきが薄くなる。尤も中期末葉以前とは異なり、石器組成上では石鏃が主体的な構成になっている点に注意すべきだろう。

中期末葉、そして晩期を画期として一遺跡内での出土が異なる様相が確認された。では、この現象に因果関係はあるのだろうか。後期の事例からは板状石器が目的とした行動が漁撈活動に密接な関係を持つ可能性が示唆されるが、それ以外では否定的にも見受けられる。仮に関係があるとするなら、どのように評価されるだろうか。従来、中期末葉から後期へかけての漁撈活動の活発化が唱えられてはいた。しかし石器組成上では主体的とは言えず、際立った適応戦略とはされてはいなかったが、ブロック内において特殊化した石器がそれらに関与していたのなら、評価は自ずと変わってくる。同時に遺跡内石器組成では正しく反映されなかった生業活動の存在がクローズアップされるだろう。また、関係性が存在するとすれば、上記の三つの出土数パターンは何を意味しているのか。板状石器の使用対象・目的に適用する民俗誌のモデルについて、条件を絞る上でも、まず礫石錘と漁撈活動について考察する必要があると思われる。

4、新潟県中央部での漁撈活動

新潟県内では前期初頭より、新潟平野など低地・平野部において安定した漁撈活動への傾斜が見られる。事例として、笹山前遺跡等での礫石錘の多数集積やデポジット例 (前田 2002) が上げられる。砂丘上遺跡をはじめとして礫石錘の出土例が多く、土器片錘は非常に希少となっている。貝塚遺跡が希少な県内において数少ない動物遺存体の例としては、前期後葉の事例で豊原遺跡でトゲウオの、干納遺跡ではサケの背骨の一部が検出されている。

前期終末を期に、海岸部や平野部で礫石錘は減少していく。石器組成上では石鏃へより傾斜していく傾向が確認される。一方、内陸部では礫石錘が増加していく。同時にサイズの縮小が生じる。中期末より出現した切目・有溝石錘・有溝土錘も小型で礫石錘と調和的である (前田 2005)。

だが、礫石錘についてブロック内の様相を俯瞰すれば、安定した出土状況とは言えない。大規模集落ではピンポイント的に幾つかの遺跡で比較的多く保有していたと考えられるのは上記した。けれど通常は石器組成上でさしたる非常を占めず、副次的に留まる場合

が殆どであり、全く出土しない場合も珍しくはない。

それでも『内陸部では増加傾向』とできるのは、河川氾濫域や河岸段丘上にある小規模遺跡の存在が理由である。河川氾濫域の小規模遺跡は礫石錘を主体的に出土する傾向が強い(新潟県教育委員会 1999)。段丘上の事例としては芹沢遺跡、氾濫域では金塚遺跡を上げる。

芹沢遺跡は長岡市、信濃川支流五十嵐川を見下ろす河岸段丘上に存在し、後期前葉を中心に営まれた遺跡である。石器組成上、76点(34.4%)と石錘を主体としている。切目・有溝石錘はその内で少なくとも15点を数える。

金塚遺跡では縄文時代の遺構はピット一基のみであり、包含層に含まれる土器は広い時期に及び、長期間に渡って利用された土地だと考えられる。縄文時代当時の自然河道跡が検出されており(図 16) その周辺から400点以上の礫石錘が出土している。この状況は礫石錘が漁撈の、つまり漁網錘として利用されていたとする仮定を裏付ける一つの証左だろう。

小規模遺跡と石錘の親和性は、つまり漁撈活動がキャンプサイト的な場所で営まれた可能性を示唆する。また興味深い点として、礫石錘の石材を示すと殆どが安山岩や砂岩で構成されている。即ち川原石である。礫の両端を欠くのみという製作方法と併せて、また切目・有溝石錘との比較関係において、礫石錘は便宜的な道具とできる(*5)。石器石材とキャンプサイトの小規模遺跡からの出土という状況からも、現地で生産されたとするのが妥当だろう。縄文時代中期初頭～後葉において、漁撈関係の遺物が大規模集落では低比率でしか存在しない点からも補強出来る。

礫石錘が漁網錘であることは、技術的脈絡からも位置付けられる。縄文時代中期末葉に存在した城之腰遺跡では、縄かけ部である打ち欠きの作出方法に幾つかのパターンが見られる。端部が尖っているもの、線上であるもの、端部が平坦なものがあり、その内最後を覗いては剥離による。平坦なものについては敲打によるツブレと判断されている。また階段状剥離のものも存在しており、これらについては端部を垂直敲打或いは両極敲打によってある。当該遺跡の出土品に付いては、666点中480点以上という大半が敲打によるものとされており、「石錘を従来のように単純に切目(有溝)石錘と礫石錘に二分する事に疑問を生じさせる。今後に礫石錘を敲打石錘と剥離石錘に分離する必要性があるのではないだろうか」(田中 1991)。また城之腰遺跡のみならず同時期中道遺跡、後期初頭の芹沢遺跡からは、二対の縄かけ部を有する礫石錘が少数ながら確認されている(図 19)。

これらの変化が確認されるのは、比較的管理的な漁網錘であるとされる切目・有溝石錘が登場する時期である。定義上、縄かけ部の敲打による作出や二対の設置は礫石錘のそれではなく、切目・有溝石錘に施される技法である。いわば礫石錘に切目・有溝石錘の影響が表現された形であり、このような転写が起こる理由として、両石器間に機能上の親和性があったからだと考えられる。

礫石錘は渡辺誠氏の指摘によれば、漁網錘とはしないとされながらも、一部にのみその

機能を認められている。木曽川流域に着目し、軽量であること、中期後半以降、河岸段丘に立地する遺跡から出土するという三条件をもって礫石錘を漁網錘として考えるとしている（渡辺 1973）。しかし新潟県内では上記のような河川付近で確認される大量の出土という条件から、漁網用であるとされてきた。礫石錘は漁撈を実施する場で製作される便宜的な道具であったと見なすなら、論理的な整合性が整えられる。このように、縄文時代中期よりブロックでは、石錘を使用した内水面漁撈活動が活発に行なわれていた。

勿論、河川氾濫域や河岸段丘上の小規模遺跡は、板状石器と石錘が共存していなかった中期後葉以前にも、板状石器を多量に有する遺跡の周辺部にも一般的に確認されている（図 18）。板状石器を数多く有する遺跡は、殆どが大規模・環状集落である。遺跡分布では、大規模集落と周辺のキャンプサイトの集落、板状石器を所有するような遺跡を取り囲む、礫石錘所有遺跡と位置付けられる。

、モデルの適用による考察

1、民俗例からの行動パターンの抽出

これまでに明らかになった板状石器の機能についてまとめる。まず集中して選択される比較的柔らかい石器石材から、対象物は硬質のものではなく、植物等容易に加工できる物だと想定できる。石器を用いた行動は、裏面と側縁刃部を使って対象物を『擦る』・『削る』ものであろう。更には未製品から完成品、磨耗し、再調整を施した使用中の物、破棄された物と石器の一連の段階が遺跡内で収まっており、板状石器を用いた作業は遺跡内で完結した可能性が高い。類似する三脚石器と比べてより規格化・特殊化が進展している。以上から板状石器は採集または加工に供された石器の蓋然性が高い。

このような石器が中期末より後期全般にかけて、礫石錘と共に多数、同じ遺跡内に存在する事実を単純に考えれば、網漁つまり漁網の準備が上げられる。板状石器は植物繊維を採る為の器具であったと思いがち。しかし中期末葉以前、晩期以降に関しては両者は現れる場所を違えており、一概に結びつけられない。

板状石器を繊維採りの道具と仮定するならば、中期初頭～後葉における三脚石器・板状石器と礫石錘の排他性、同空間に存在しない理由を解決しなければならず、つまりは大規模遺跡と小規模遺跡間の動的関係性を明らかにしなければならないと同義である。その上で繊維採りという役割を持つ器具が存在する妥当性を考察しなければならない。

縄文時代の東日本においては、少数の拠点集落を中心に、季節的に偏りがある資源の開発を行なう為人間集団は離散集合を繰り返していたと、一般的に考えられている（松井 2004 など）。このようなコレクター・システムは中高緯度に住む狩猟採集民には普遍的な行動である。特に冬季の閉鎖性が強い環境では、冬季と夏季の集落は異なる。狩猟採集民の居住パターンは渡辺仁氏をはじめとして、定住性の問題を含めて議論されている（渡辺

1990 等)。

今回は奥三面の民俗例を選択した。花粉分析では、縄文時代中期中葉の清水上遺跡の周辺環境がコナラ亜属・ブナ属などを主とする冷温帯林、同じく後期初頭の元屋敷下段遺跡でも同様の結果が報告されている。奥三面地域の植生もまたコナラ・ブナ属が主体となっており、気候条件は類似したものである。また奥三面地方は秘境と称される程、現代においても交通が非常に困難な事から、自給自足的な生活が色濃く残存していた。開発・依存する食糧資源はほぼ縄文時代と共通するものとされている(朝日村教育委員会 2002 等)。

奥三面地方の漁撈歴は以下のようになっている。マスは五月末から六月上旬より遡河してくるが、マス掬りの最盛期は夏場だったという。夏場にはアユ漁も実施されていた。シロザケは十月になれば遡上してきており、ヤス漁・鉤漁で獲っていたと報告されている。イワナ・ヤマメ・ウグイなど遡上性のない地付魚は、雪深く交通が閉鎖される時期以外、獲られていた。魚類は保存加工され、冬季の食料に供された。

漁法別に整理すれば、ヤス・鉤漁は遡上性ある魚に、網漁は小魚など地雑魚に適用されている。マス漁など内水面漁撈活動は岩戸・泊り場など川小屋を漁場付近に設置して、実施した(図 17)。ドオの設置もロケーションや仕掛ける人間が権限として定められていた。

漁撈歴より網を使用した漁(トアミ・エナミ)は日常的に行なわれていた模様である。基本的には地雑魚が対象という性質上(*6)、季節性に左右される頻度が低いからである。しかし遡上するサケ・マス類のように生活基盤に影響を及ぼす程の生産性は、生態的にない。内水面漁撈活動としては、日々の糧を得るような副次的なものであった。

河川での漁場という限定された場所を開発する以上、居住を目的とする集落からは移動して活動する必要がある。漁撈に使用される道具が集落間と漁場を移動するかどうかは、その道具の便宜性/管理性に関ってくるだろう。ヤスや鉤などの道具は民俗例では無論、金属製の為に集落で用意する他なく、両地点を移動するのは間違いない。だが例としてオキバりに用いられる錘は、周囲から取り上げた川原石であるので、漁場から移動する事はない等である。

漁網は当然、前もって用意しなければならない。奥三面地方では網の製作は冬季から春にかけて行なわれる。豪雪に閉ざされる冬の仕事としてである。使用する繊維は麻・シナ・イラクサが報告されている。朝だけが栽培植物であり、夏場、盆当たりに刈り取り、乾燥させて置くという。繊維取りは工具を使わない方法や木の枝のみを使用するなど、取り分け道具を必要としない場合も多いが、衣服作り等に大量に要する際にはオフキ板とカナゴという専用の民具を用いた。漁網製作に供される繊維もその一部である。オフキ板・カナゴの機能は繊維を『擦り取る』ものである。

漁場という空間的に限定された資源構造への移動と、それに伴う道具の便宜性/管理性による移動は普遍的な現象であろう。漁撈具は便宜的なもの程、キャンプサイトより移動する頻度が低い。居住を旨とした冬集落に存在する物は管理的に用意される道具であると推

測される。また用意する対象物が大量生産性を有すれば、効率化の為に工具は特殊化・規格化すると考えられる。製作技術が一定の技法に纏まり、作業として導入される行為が定まってくるからである。奥三面の事例では、繊維取りにも確認された。大量生産される繊維加工物の一環としての漁網は、強靱なものであるイラクサ製でもワンシーズン持たないとウデへの民俗事例で明らかになっている。無論、漁網のみの為に特殊化・規格化した工具が使用されるのではなく、繊維製品全般への需要が理由の一つとして上げられるだろう。

2、内水面漁撈活動への民俗事例からのモデルの適用

奥三面の事例から抽出したこれらの構造をモデル化すると図、20となる。極めて広汎な事例に当て嵌まり得るパターンであると考えられる。奥三面地方の気候環境が縄文時代中期中葉のブロック、及び後期の奥三面地方と類似する点は先述した。食料資源の構造に関しても、内水面漁撈に限れば対象魚の生態が劇的に変化、或いは当該地での種の消滅がない限り共通すると考えられるので、問題にしている中期から後期にかけての考古学的資料に適用する事に妥当性はあるだろう。

即ち環状構造を取るような規模の遺跡を冬集落と仮定し、河岸段丘や河川氾濫域に立地する小規模遺跡を仮小屋が設置されたような内水面漁撈の場と置く。両者の間には季節的移動があり、夏季取り分けシロザケやマスの遡上期に小規模遺跡は利用された。冬季は貯蔵施設を設けた大規模集落に居住した。当然ながら施設面からもその事が覗える。中期初頭より新潟県の山間地では長方形柱穴列が特徴的に存在し、中期末には炉址が無い事や棟持柱址の出現から、掘立柱建造物址と認識されている。この変化はフラスコ土坑の現象と足並みを揃えているという指摘もある(*7)。貯蔵施設や共同の作業場、ロングハウスとしての機能が考察されている。

以上のようなモデルに対して、ブロックでは中期初頭から後葉まで忠実であろう。積極的に石器組成分析が行なわれる大規模遺跡において、漁網用礫石錘が希少であった理由である。原・野首・城倉・小坂遺跡などでは一定量を有するが、数百点という出土数或いは石器組成上大きな比重を占めるケースは極めて少なく、例の上では原遺跡と城倉遺跡のみである。遺跡の立地に期待する役割通りに行動が取られていたなら、極めて便宜的な漁撈具であった礫石錘は、漁場から移動する事は殆どない。釣り針やヤス等管理的な漁撈具は県内を俯瞰しても極めて少数であり、その事も相俟って当該県での漁撈活動の希薄さが訴えられている原因でもある。

変化は中期末葉より認められる。製作及び使用地よりの移動の頻度が低い筈の便宜的道具である漁網用礫石錘が、城之腰遺跡や中道遺跡という居住と貯蔵を旨とした場所から、今まで決して、と表現しても良い程共存しなかった石器である三脚石器・板状石器と共に現われるのである。両遺跡からも切目・有溝石錘が出現している。城之腰遺跡では軽石製の浮きも製作されており、管理的漁撈具が所有された時期でもある。この時期に内水面漁

撈活動が活発化した証だろう。また、両遺跡は県内では逸早くトチの実の貯蔵をはじめたらしく、専用のピットが検出されている。各側面で資源開発の新たな動きがあった。以後、後期を通じて大規模遺跡での板状石器と礫石錘は姿を共にするのは繰り返し述べた通りである。

縄文時代後期中、安定する二者の組み合わせであるが、民俗事例との環境的近似から特に奥三面地方に注目したい。中期末葉から当該地域の拠点集落と見なされるアチャ平上段遺跡から、この組み合わせは突然現われる。礫石錘の不在は河川周辺の小規模遺跡という、調査が行き渡らないロケーションに存在するからであろうが、三脚石器や板状石器は、この地方では伝統的に存在していなかった。奥三面遺跡群では石器組成の特色として、削器・搔器を含む不定形石器が主体を成す。生業に纏わる器種では、中期中葉から後葉において基本的に磨石類を大量に排出する、中期山岳的色彩を典型的に有するが、打製石斧は卓越しない点にブロックとは相違がある。磨石類と打製石斧は生業構造として、前者は堅果類を、後者は地下茎根類をメジャーフードにする点で対立する（今村 1989）とする場合もあり、注意を要する。中期末葉に入ると、以下の変化が現われる。生産跡と考えられる、大量の石鏃未製品の出土と、組成内における石鏃の占有度の上昇がある。同時に磨石類の出土数低下が起こり、主体的生産具の座から滑り落ちている。磨製石斧の生産が開始されるなどの大きな画期があり、その内に板状石器・礫石錘を含む漁錘の出現がある。しかしアチャ平上段では板状石器が千点以上、組成比率にして 12.6%に対して、礫石錘はたった五点しか見出されていない。元屋敷下段遺跡でも板状石器二百点あまり、比率 0.7%に対して石錘は八十三点、比率 0.2 と安定した現われ方とは到底言えない点が問題としてある。

遺跡数が激減する中期末葉という画期において、数々の新たな行動の痕跡が残されている中で、板状石器と礫石錘の出現は極めて小さく映る。しかし後者に関しては、用途が漁網用であるなら、特に礫石錘は冬集落であろう大規模集落には存在し難い石器である。内水面漁撈活動にある種の変化が起こったと考えられる。

この変化はブロックにおいても同様である。拠点集落に便宜的漁撈具である礫石錘が大変活発に登場した事実は、当時の漁撈歴に一定の変化が起きた可能性があるのではないか。奥三面の民俗事例では、十一月、十二月という時期以外を通じて網漁が実施されている。冬季においても、食糧事情から小魚類・地雑魚などを得ていた。同様の事が中期末葉以降遺物に残る規模で行われていたのではないだろうか。ならば、末葉以前と以降では内水面漁撈活動へ費やすコストの比重が増大した事となり、しいては食料資源の問題にもなろう。冬季にも網漁を拡張して行っていたのなら、漁法の性質上集中的な資源開発ではなく、日常的食料の補給的な位置付けとなる。いずれにしても、中期末葉から内水面漁撈活動が活発化、拡張されたとみるべきだろう。このように、礫石錘を視点に内水面漁撈活動の変化が覗える。

3、板状石器への民俗事例からのモデルの適用と問題点

板状石器については、果たして冬集落での繊維加工具として位置付けられるだろうか。内水面漁撈の変化に即して、その変遷を確認すると以下ようになる。ブロックを含む新潟県内陸部に礫石錘が波及してきたのは縄文時代前期末葉とされている。清水上前期集落遺跡でも確認されており、中期初頭に清水上遺跡・五丁歩遺跡から三脚石器と共に出現するのが板状石器である。この両石器を一定量有するのはほぼ拠点的遺跡と見なされる遺跡である。板状石器は中期末葉になって始めて漁撈活動を行なっていたであろう場所に登場する。内水面漁撈活動の画期である中期末葉に石錘と合流し、後期初頭以降石錘と共に広がる過程において、同機能を有していた三脚石器が消滅する。つまり板状石器に機能が集約されていった。これらは繰り返し述べた通りである。

季節的スケジュールに採り込まれた繊維採りは、居住の場で営まれる行動であった。モデルでは冬集落を中心に実施されている。ならば中期末葉まで漁撈活動の痕跡と空間を換え、冬集落においても内水面漁撈が実施されたと考えられる場合にそれらと共存する。状況的には板状石器のあり方はモデルと符合し、仮説として妥当性があると判断する。

三脚石器とのセット関係から板状石器単独への機能集約については、他の生業行動と同じく当時に推測されている気候の寒冷化が関与しているのだろう。漁網と初めとする繊維加工製品への需要が高まったものと考えられる。しかしここには問題がある。何故新潟県内陸部、信濃川水域では板状石器という形に特殊化したのか。同様の機能を持つ三脚石器は日本海では富山県以北の東日本で散見される石器である。広域的に見れば、三脚石器こそ加工具として採用されていった物となる。ここにはブロックに特有の環境的要因が関与していると考えられるが、具体的な想定を持ち合わせていない。

また板状石器への機能集約に寒冷化が関与していたとするなら、三脚石器が消滅した後の各地では、その機能を他の石器に移行させた筈であるが、それは一体何であろうか。板状石器には類似の形状をする石器が、やはり東日本一帯に存在する。円盤状石製品等呼ばれるものである(図 21)。

しかしこれらは全身を研磨するなど製作技術等に差異があり、また使用痕などの報告もなく、今回は別の器種として扱った。岩手県八木遺跡、手代森遺跡や秋田県上ノ台A遺跡から出土しているものは研磨を施される物より打製による刃部を有する物が多く、板状石器と外見上は類似している。しかし器体の厚みなど企画性が薄く、また線刻がある場合などがあり、同様の機能を有していたとは推定し難い。これらの円盤状石器は縄文時代前期から登場している点が最も異なる点である。板状石器が三脚石器と影響を及ぼし合いながら成立したと考えられる以上、別の出自による石器とするのが妥当と思われる。

このように板状石器という形への規格化・特殊化の要因は極めて不鮮明である。加工対象であった繊維の違い等も考えられるが、考古学的資料としては現在出土例が皆無である点、民俗事例においては使用される繊維、取り分け網などに供される種はイラクサ等にほぼ定まっているとしていい程、普遍的な点からは強く推す事は出来ない。本論の現状では、

これらの点を明らかに出来なかった。

4、 ブロックの生業行動についての結論

板状石器という特殊な石器の成立背景については明らかに出来なかったが、石器の観察及び礫石錘との関係性からは、繊維の加工に使用された道具として内水面漁撈活動の変化に関した石器とする事には一定の妥当性があると考えている。直接的に漁撈等生業活動に従事する類ではないものの、一つの画期を示す物質文化だろう。このような特殊化した石器と間接的であるが連携した動きを示した礫石錘は、土器片錘などが希少であった新潟県内では、便宜的な漁網錘として機能していた。また中期末葉から板状石器を有する、つまり冬集落と推察される拠点集落に活発に現われる事から、内水面漁撈活動が行なわれた時期が拡張された可能性、少なくとも拠点集落でも実施されるようになった。資源分布の偏在化が進んだと考えられる時期に、今まで行なわれなかった拠点集落での漁撈活動の存在は興味深い(*8)。再度の例示となるが、岩之原遺跡は中期集落と後期集落に分類されるが、後者ではじめて板状石器と礫石錘が出現するし、奥三面遺跡群でも各種石錘が確認される遺跡は中期以前からも存在していたにも関わらず、その出現は後期に入ってからとなる等、ロケーションに変化は無い場合も多々である。元来漁場として開発できた地点を移行期に利用し始めたのか、或いは環境の変化により利用可能になったのか。おそらくは両方ともに起こり得ただろう。

季節的移動を前提とする以上、冬集落までの内水面漁撈活動の延長は一層の食料資源の開発を意味する。貯蔵した食料を中心に冬季を過ごしたであろう空間で、更に内水面漁撈を行うようになったのは興味深い。確認されている漁撈具が漁網錘と見なし得る以上、網漁の基本的な対象となる魚類の生態から画期的な漁獲量などは期待できないものの、一定の成果あつての行動でなければ採用されない。縄文時代後期の石器組成において、打製石斧が残存し、磨石類が優越した立場を取り続ける事からは、強化された漁撈活動は中期山間部的な植物資源の利用を補佐する形で実施されていたとするのが妥当である。現状では、

ブロックにおいての中期末葉～後期初頭までの集落遺跡の存続性は、この現象に支えられたものであると推測する。

だが結果として、延長された内水面漁撈活動は後期以降の主体的な生業にはなり得なかった。縄文時代晩期に入ると有溝石錘がごく少数見られるだけとなり、内水面漁撈活動の活発化を示した管理的石錘や他の漁撈具も殆ど姿を消す。晩期中、唯一板状石器を有する藤橋遺跡では礫石錘が4点のみの出土となり、主な石器は石鏃となるように、ブロックも最終的には他のブロック、しいては汎東日本的な歩みと同じく狩猟具に依存していく様相がある。

結論 中期末葉から後期初頭にかけての生業行動の変化から

問題とした縄文時代中期末葉から後期初頭への移行期において、新潟県内の遺跡が持つ持続性を支えたであろう行動は、何れも中期より見られた行動の拡大延長上にあるものであった。ブロックに特徴的だった板状石器の存在と特殊化、また便宜的漁網錘の拠点集落での登場などは画期ではあるものの、決して新要素ではない。中期から存在していたものが強化、活発化した現象である。他のブロックにあった石鏃の増加や磨製石斧の大量生産の開始等も同様である。これらは当該期の環境が冷却化・湿潤化した事を受けて、縄文時代中期社会が元々有していた行動戦略のうちから、より適したものを以って適応しようとしたと解釈出来るだろう。

それでも尚、ブロックの特徴は県内で個性的であるだろう。石鏃の増加とそれに伴う打製石斧・磨石類の低下は縄文後期の東日本において普遍的なものである。であるのに対して、後期に至っても県内において最も遺跡密度が高いままである信濃川水域周辺、ほぼ

ブロックと重なりあう範囲においては、それら一般的傾向の進展が遅く、漁撈活動の拡大延長と、現状ではそれに関与するだろうと考えられる三脚石器・板状石器は県内では他に無い要素であるのだから。石器の現れ方から考えるに、新潟県山間部信濃川水系周辺では、中期的な植物食の開発を続行しつつ、狩猟や漁撈の側面でも補っていった形となる。他のブロックと比べて多角的な開発の仕方が中期末葉から後期初頭にかけて、拠点的遺跡を存続させた理由だろう。偏在していったと考えられる食料資源の分布において、植物の利用を中心的に続けていた点がまず一点ある。次に内水面漁撈活動という資源の場所がより指定される行動を強化した点、そして従来より遺跡の立地が河川環境に恵まれていた点が上げられる。

他のブロックを見れば、及びブロックは磨製石斧生産の活発化があった。これも石器石材環境という限定される空間を利用し続けた故に、従来からの遺跡が営まれ続けたとも解釈出来る。とりわけブロックでは硬玉という希少な石材を利用するために、この傾向は強かった。ブロックにおいては元来石鏃に依存した生業構造が、結果として後期以降の傾向と一致している。有効に資源を開発しうる場所として、やはり中期末葉から後期初頭へ存続する遺跡が多かったのではないか。気候が冷却化・湿潤化したであろう環境の変化に際して、新潟県内では石器組成を多様化し、資源分布の偏在化に対応していたとできる中、新潟県内では資源の分布が空間として比較的固定される性質のものを選択し、活発化させる行動戦略の対象としたものと考えられる。資源分布の遍在化はキャンプサイト等の小規模遺跡の規模をより縮小しかねず、新潟県内における状況下では冬集落の必要性和、位置がある程度定まっている資源の開発を行なう大規模集落との格差が大きくなり得る。だからこそ当該期において、検出された遺跡数の減少と拠点的集落の持続性が並び立ったのではないか。

縄文時代中期末葉～後期初頭にかけて生業行動の変化について追求した結果、その端緒については明らかに出来たと思っているが、当然ながら未だ問題は山積している。具体的

には板状石器という特殊化した石器には今後使用痕分析等、詳細な調査が必要である。その上で目的、特殊化の背景などを再考しなければならない。石器組成についても阿賀川以北や沿岸部に良質の資料が未だ数少なく、空白が大きい事は否めない。また新潟県という比較的狭い範囲でも地域的環境に応じて行動戦略に差異が出る以上、縄文時代中期社会の『壊滅』という現象、環境の寒冷化という事態への人類の適応を捉えるには、より対象地域を広げつつ、各々の環境に横たわる一般性と特殊性を抽出していかなければならないと思われる。

謝辞

末筆ながら、佐藤宏之先生には多大なご示唆とご指導を賜りました事、またお忙しい中、資料の閲覧等修士論文研究につきましてご協力頂いた全ての方々に感謝致します。

註

- 1) Binford, L.R. (1982) を紹介した羽生 (2000) に従った。
- 2) 片刃状打製石斧や彫刻石皿は長野県北部から新潟県山間部、信濃川流域にまで分布する (高橋 1993)。
- 3) 清水上遺跡内での三脚石器及び板状石器の検出地点に相違は見られず、遺構外からの出土が殆どである (新潟県教育委員会 1990、1996)。
- 4) 城倉・小坂遺跡は表採資料を含む数字を報告しており実数は不明であるが、石鏃類・打製石斧が石器組成内で大きな比重を占める。野首遺跡は石器に関して整理中であり、正確な数値は未報告であるが上記二遺跡と類似するパターンだという (十日町市教育委員会文化財課 1998)。
- 5) Binford, L.R. (1977等) を紹介した沢田 (1999) に従った。
- 6) 勿論漁網の使用法には流し網・刺し網等の種類があり、またサケ・マス類の遡上性ある魚の漁に利用する民俗例もあるが (田口 2005 等)、網自体の質や船の利用、河川条件など考古学的資料を用いての検討は現状では不適當である為、最も基本的な機能に限定している。
- 7) 報告者は「貯蔵穴土坑の縮小化と長方形高床式建造物の出現はほぼ時期的に一致する」として貯蔵インフラだと想定している。同じく同時期に長方形高床式建造物の出現がある中道遺跡ではトチの実の屋内貯蔵が火災痕跡から確認されている。
- 8) ただし、小規模遺跡等で出土する礫石錘と全く同様のものが出土する訳ではない。原遺跡や城之腰遺跡、中道遺跡、元屋敷下段遺跡の礫石錘に関する報告では、その重量は 20 ~ 40 g を平均として集中し、切目 (有溝) 石錘と調和な数字を示すのに対して、金塚遺

跡では200～250gのものが最も多く、芹沢遺跡では平均重量251gが報告されている。その機能上、重量は使用法に関ると考えられ、問題となる点である。

引用・参考文献

- 会津高田町教育委員会 1989「十五壇遺跡発掘調査報告書」会津高田町教育委員会
会津高田町教育委員会 1990「十五壇遺跡発掘調査報告書第3次調査」会津高田町教育委員会
- 朝日村教育委員会 1978「朝日村の民俗 第2」朝日村教育委員会
1990「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書」朝日村教育委員会
1991「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書」朝日村教育委員会
1993「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書」朝日村教育委員会
1993「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書」朝日村教育委員会
1995「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書」朝日村教育委員会
1998「アチャ平遺跡中・下段」朝日村教育委員会
2002「アチャ平遺跡上段」朝日村教育委員会
2002「元屋敷遺跡 2(上段)」朝日村教育委員会
2002「元屋敷遺跡 3」朝日村教育委員会
- 朝日村教育委員会[他] 1997「二又遺跡 / 堅岩遺跡 / ガラハギ遺跡」朝日村教育委員会
朝日村教育委員会編 2002「奥三面民俗文化財調査報告書. 2」朝日村教育委員会
- 阿部昭典 2001「縄文時代中期末葉の集落構造の変容 - 信濃川上・中流域を中心として - 」新潟考古 12
- 阿部朝衛 1985「縄文時代石器研究の視点と方法」法政考古学 10
1997「(2) 石材の獲得と磨製石斧の生産」『新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究(新発田市中野遺跡の共同資料調査)』北陸考古学 8
- 池田亨,荒木勇次 1987「柳古新田下原 A 遺跡」大和町教育委員会
池田亨,荒木勇次 1988「水上遺跡」大和町教育委員会
池田亨,細谷菊治 1990「水上遺跡」大和町教育委員会
- 伊勢宮遺跡調査団 1981「伊勢宮」山ノ内町教育委員会
- 石坂圭介 1999「第三節 集落と住居」『新潟県の考古学』高志書店
- 糸魚川教育委員会 1992「五月沢 岩野B遺跡」糸魚川市教育委員会
糸魚川市教育委員会 1997「糸魚川市内遺跡発掘調査概報」糸魚川市教育委員会
- 伊藤 玄三 1991「縄文中期の遺跡分布の地域的分析(奥会津田島の例)」法政考古学 16
- 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌: 渡辺仁教授古稀記念論文集』六興出版

いわき市教育文化事業団 1985「愛谷遺跡」いわき市教育文化事業団
 岩沢寅二編 1978「新潟県中魚沼群津南町反里口遺跡発掘調査報告書」津南町教育委員会
 魚沼先史文化研究会 1998「原遺跡の研究」魚沼先史文化研究会
 大泰司統 1997「縄文時代のシカ狩猟の柵」動物考古学 9 47～51 動物考古学研究会
 大沢遺跡調査団 1981「大沢遺跡」巻町教育委員会
 岡本郁栄 1994「野崎遺跡発掘調査報告書」西山町教育委員会
 小野昭・前田精明・小林巖雄・小池裕子・藤田英忠・島村忠淳 1988「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』
 小山修三 1984「縄文時代」中公新書
 可児通宏 1993「縄文時代のセトルメント・システム」季刊考古学 44
 柏崎市教育委員会 1985「刈羽大平・小丸山」柏崎市教育委員会
 金井町教育委員会 1977「堂の貝塚：新潟県佐渡郡金井町堂の貝塚発掘調査報告」金井町教育委員会
 金子 直世 1991「縄文時代中期初頭の居住形態」物質文化 55
 金山喜昭 1996「海進海退現象」『考古学による日本歴史16 自然環境と文化』雄山閣
 木島勉 2005「火焰土器分布圏における翡翠製大珠」『火炎土器の研究』同成社
 吉川町教育委員会 1974「長峰遺跡発掘調査報告書」吉川町教育委員会
 木村有紀 1996「初期人類の行動戦略研究概説」動物考古学 7
 頸城村教育委員会 1987「塔ヶ崎遺跡」頸城村教育委員会
 五泉市教育委員会 1984「馬下稲場発掘調査報告書」五泉市教育委員会
 小出町教育委員会 2002「居平遺跡. 1次調査」小出町教育委員会
 2002「居平遺跡」小出町教育委員会
 越路町教育委員会 1993「多賀屋敷遺跡 第2次」越路町教育委員会
 1984「多賀屋敷遺跡確認調査報告書 第2次」越路町教育委員会
 1983「多賀屋敷遺跡調査報告書」越路町教育委員会
 小千谷市教育委員会 1987「徳右エ門遺跡・中道遺跡・中道東遺跡」小千谷市教育委員会
 小林達雄 1973「多摩ニュータウンの先住者 - 主として縄文時代のセトルメント・システムについて - 」月刊文化財 112
 小宮山 隆 1997「縄文時代における遺跡・集落の分布傾向と周辺地形の関わりについて(予察)」山梨懸考古学協会誌 9
 小薬 一夫 1985「縄文前期集落の構造(内陸部と海浜部の集落比較から)」法政考古学 10

- 坂口 隆 1998「縄文時代の貯蔵穴(1)(後・晩期)」動物考古学 10
 1999「西日本縄文時代狩猟採集民モデルのための試論(渡辺仁著『縄文式階層化社会』の再検討を通して)」動物考古学 12
 2003「縄文時代貯蔵穴の研究」『未完成考古学叢書』
- 佐藤広史 1987「住居跡の床面遺物について(東北地方の縄文時代後・晩期を中心として)」福島考古 28
- 佐藤宏之 1989「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌：渡辺仁教授古稀記念論文集』六興書房
 1995「技術的組織・変形論・石材受給 - 下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察 - 」『考古学研究』 47 - 1
 1999「新考古学 New Archaeology は日本の旧石器時代研究に何をもたらしたか」旧石器考古学 58
 1999「考古学理論と旧石器時代研究」石器文化研究 7
 2000「北方狩猟民の民族考古学」北方新書
 2005「総論 ロシア極東の民族考古学調査」『ロシア極東の民族考古学：温帯森林猟漁民の居住と生業』六一書房
- 佐藤宏之編 1998「ロシア狩猟文化誌」慶友社
- 佐藤雅一 1990「長岡市岩野原遺跡の集落について」新潟考古学談話会会報 5
 2003「魚沼地方の縄文ムラ - 縄文時代中期における活動痕跡の様相 - 」『新潟県の縄文集落 第1分冊』新潟県考古学会
- 佐藤雅一編 1989「上ノ台2遺跡」六日町教育委員会
- 佐藤雅一・宮田千里 2000「遺跡分布から読み取れる情報」新潟県考古学談話会会報 22
- 沢田 敦 1999「技術的組織」『用語解説現代考古学の方法と理論.1』同成社
- 品田高志 1996「季節と縄文集落 柏崎平野における縄文遺跡群の検討から」新潟考古学談話会会報 16
- 品田高志 1998「縄文中期における住居形式の検討(関東・北陸における主柱五本形式の住居)」新潟考古学談話会会報 18
- 塩沢町教育委員会 1988「万条寺林遺跡」塩沢町教育委員会
 1988「十二木遺跡」塩沢町教育委員会
 1990「吉峰遺跡」塩沢町教育委員会
 1993「原遺跡発掘調査概報6」塩沢町教育委員会
 1998「原遺跡周辺遺跡確認調査報告書」塩沢町教育委員会
 1998「原遺跡」塩沢町教育委員会
- 下田村教育委員会 1986「藤平遺跡発掘調査報告書」下田村教育委員会
- 新発田市教育委員会 1992「館ノ内遺跡D地点の調査」新発田市教育委員会

- 1998「上車野E遺跡」新発田市教育委員会
- 末木 健 1987「縄文時代集落の継続性(II)(縄文中期八ヶ岳山麓の石器組成より)」
山梨懸考古学協会誌 1
- 関 雅之 1973「ツベタ遺跡発掘調査報告」安田町教育委員会
1996「まとめ 3石器」『清水上遺跡 2』新潟県教育委員会
- 鈴木次郎 1977「縄文時代の直刃式片刃打製石斧について 神奈川県尾崎遺跡出土
例を中心として」『神奈川考古二号』神奈川考古同人会
- 鈴木俊成 1990「遺物 2石器」『清水上遺跡』新潟県教育委員会
1999「第2章第2節 早期から版期の石器組成」『新潟県の考古学』高志書
店
1998「新潟県の縄文時代石器組成」新潟考古学談話会会報 18
- 教育委員会 2001「八反田遺跡」田上町教育委員会
- 田海 義正・高橋 保雄・高橋 保 1991「清水上遺跡」をめぐって」新潟考古学談
話会会報 7
- 高橋保 2003「五丁歩遺跡と清水上遺跡の比較検討」『新潟県の縄文集落 第1分冊』
新潟県考古学会
- 高橋 保,高橋 保雄 1993「五丁歩遺跡」新潟考古学談話会会報 11
- 高橋保雄 1999「阿賀川以北の磨製石斧生産の様相」新潟県考古学談話会会報 2
0
- 滝沢規郎 1999「奥三面遺跡群の石器組成 - 遺跡類別に見た石器組成比較 - 」新
潟県考古学談話会会報 20
- 滝沢村教育委員会 1986「耳取遺跡」滝沢村教育委員会
- 田口洋美 2002「北方の狩猟誌」東北学 7
2005「アムール川流域の人々 アムール川流域少数民族の狩猟漁撈活動」
『ロシア極東の民族考古学：温帯森林猟漁民の居住と生業』六一書房
- 田中和夫 1997「フラスコ形土坑の終焉」土曜考古 21
- 田中耕作 1996「縄文時代に置ける鉄鉱石の利用 阿賀川以北の遺跡を中心として」
北越考古学 7
- 田中 靖 1991「遺物 2縄文時代」『関越自動車道関係発掘調査報告書』新潟県教
育委員会
- 谷口康浩 1998「環状集落形成論 - 縄文時代中期集落の分析を中心として - 」古代
文化 50-4
- 辻 誠一郎 1997「縄文文化への移行期における陸上生態系」『第4紀研究』 36-
5
1996「人と環境の交渉史(かかわりし)」『歴博』 44
- 津南町教育委員会 1976「沖ノ原遺跡」津南町教育委員会

1977「新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書」津南町
 教育委員会
 寺崎裕助 1994「新潟県における縄文時代の拠点集落跡 中期を中心にして」新潟
 考古学談話会会報 14
 十日町市教育委員会 1961「小坂遺跡」十日町市教育委員会
 1997「野首遺跡発掘調査報告書」十日町市教育委員会
 十日町市教育委員会文化財課 1998「笹山遺跡発掘調査報告書 9」十日町市教育委
 員会
 東部町遺跡発掘調査団 1985「戌立遺跡」東部町教育委員会
 富樫 秀之 2003「遺跡動態 - 地域の特性 - 『奥三面地域』、『新潟県の縄文集落
 第1分冊』新潟県考古学会
 徳永園子 1996「縄文時代における貝類採集活動の季節の多様性と貝塚の衰退(中妻貝
 塚・荒海貝塚出土ヤマトシジミの貝殻成長線分析例を中心に)」動物考古学 7
 栃尾市教育委員会 1961「栃倉」吉川弘文館
 中川成夫 1966「ツベタ遺跡」安田教育委員会
 中里村教育委員会 1994「小丸山 おざか清水遺跡」
 中村孝三郎,中島栄一 1975「芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書」下田村教育委員会
 中村哲也 1996「生産活動と遺跡群」季刊考古学 55
 長岡市教育委員会 1981「埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡」長岡市教育委員
 会
 1995「中道遺跡 第1次」長岡市教育委員会
 1996「中道遺跡 第2次」長岡市教育委員会
 1997「中道遺跡 第3次」長岡市教育委員会
 1998「中道遺跡」長岡市教育委員会
 1985「藤橋遺跡 - 史跡整備事業に伴う発掘調査」長岡市教育委
 員会
 1991「藤橋遺跡 - 「ふるさと歴史の広場」事業に伴う発掘調査
 - 」長岡市教育委員会
 1994「南原遺跡」長岡市教育委員会
 1994「松葉遺跡」長岡市教育委員会
 長岡史起 1991「神奈川県縄文時代遺跡分布とその変遷(傾向面からわかることと推
 定される「真の分布」)」古代 92
 直良信夫 1999「日本新石器時代貝塚産貝類の研究(カワニナ類, タニシ類, キイロ
 カノコ)」動物考古学 12
 新潟県小国町教育委員会 2005「水上遺跡」新潟県小国町教育委員会
 新潟県教育委員会 1985「タテ遺跡」新潟県教育委員会

- 1991「関越自動車道関係発掘調査報告書」新潟県教育委員会
 1992「関越自動車道関係発掘調査報告書」新潟県教育委員会
 1996「清水上遺跡 2」新潟県埋蔵文化財調査事業団
 1999「金塚遺跡・三仏生遺跡・割目 A 遺跡」新潟県教育委員会
 2005「北野遺跡. 2(上層)」新潟県教育委員会
 新潟大学考古学研究室 1982「大沢遺跡」新潟大学考古学研究室
 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班編 1974「吉野屋遺跡」新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班編
 西本豊弘 1994「縄文時代のテリトリーについて」動物考古学 2
 1995「縄文人の食肉交換について」動物考古学 5
 新発田市教育委員会 1985「北平 B 遺跡・岡塚遺跡範囲確認調査報告書」新発田市教育委員会
 能生町教育委員会 1990「十二平遺跡発掘調査報告書」能生町教育委員会
 長谷川豊 1996「縄文時代におけるイノシシ猟の技術的基盤についての研究(静岡県・大井川上流地域の民俗事例調査から)」動物考古学 6
 八巻一夫 1972「東北地方南部における縄文時代中期末葉の集落構成」福島考古 14
 秦 昭繁 1999「新潟県北部地域の石器石材環境(1)(関川村堂ノ前遺跡の分析)」北越考古学 10
 秦 繁治 1996「大イナバ遺跡発掘調査報告書」名立町教育委員会
 羽生淳子 1990「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究の接点」『物質文化』53
 1990「集落の大きさと居住形態」季刊考古学32号
 1994「狩猟・採集民の生業・集落と民族誌 - 生態学的アプローチに基づいた民族誌モデルを中心として - 」考古学研究
 2000「縄文人の定住度(上)(下)」古代文化52-2、4
 2006「狩猟採集民文化の長期的変化と地域的多様性 『フォーレジングとコレクティングをこえて』所収の論考を中心として」『慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集 時空をこえた対話-三田の考古学-』六一書房
 林 謙作 1979「縄文期の'村落'をどうとらえるのか」考古学研究 26-3
 1997「縄文社会の資源利用・土地利用 - 「縄文都市」批判 - 」考古学研究 44-3
 春成秀爾 1979「縄文時代の終焉」『歴史公論』二月号
 藤巻正信 1998「陰陽石 - 異形漁撈錘 - 」新潟県考古学談話会会報 18
 藤巻正信 1998「陰陽石 - 異形漁撈錘 - 」新潟県考古学談話会会報 19
 福島県文化センター遺跡調査課 1983「長者屋敷遺跡」山都町教育委員会
 福島県文化センター遺跡調査課 1989「福島県文化財調査報告書第206集」福島県

教育委員会

福島県文化センター遺跡調査課 1989「福島県文化財調査報告書第217集」福島県教育委員会

福島県文化センター遺跡調査課 1990「福島県文化財調査報告書」福島県教育委員会

福島県文化センター遺跡調査課 1993「福島県文化財調査報告書第289集」福島県教育委員会

福島県文化センター遺跡調査課 1996「福島県文化財調査報告書第322集」福島県文化センター

細口喜則 1988「北陸西部における縄文時代後・晩期社会構造の諸問題(石器組成を中心に)」立正考古 28

堀之内町教育委員会 1981「原・居平遺跡」

本間嘉晴,関雅之,本間信昭 1975「浜田遺跡」真野町教育委員会

本間嘉晴,本間裕亨 1987「吉岡惣社裏遺跡真野町教育委員会」

本間信昭・室岡博 「兼俣遺跡」 1976 妙高高原教育委員会

前田晴明 2002「沖積地の遺跡(3)」北越考古学 13

2005「石器から見た生業」『火炎土器の研究』同成社

巻町教育委員会 1990「大沢遺跡」巻町教育委員会

巻町郷土資料館 1987「上ん原遺跡 巻町郷土資料館資料目録 9」巻町郷土資料館

松井章 2004「山地域における生業」『日本考古学協会大会研究発表要旨』

町田 勝則 1990「山梨県における縄文後・晩期石器研究の現状と課題」山梨懸考古学協会誌 3

真野町教育委員会 1975「浜田遺跡」見附市教育委員会

見附市教育委員会 1971「耳取遺跡」見附市教育委員会

1988「耳取遺跡等範囲確認調査報告書」見附市教育委員会

1982「羽黒遺跡」見附市教育委員会

六日町教育委員会 1981「宮下原遺跡(六日町文化財調査報告書)」

明専寺・茶臼山遺跡調査団 1980「明専寺・茶臼山遺跡」牟礼村教育委員会

森 和敏 2000「水際にある中期縄文時代の遺跡例(予察)(漁撈の集落・キャンプサイト)」山梨懸考古学協会誌 11

安田喜憲 1980「環境考古学事始」NHKブックス

安田教育委員会 1984「ツベタ遺跡 安田町文化財報告第10」安田教育委員会

「山に生かされた日々」刊行委員会編集 1984「山に生かされた日々：新潟県朝日村奥三面の生活誌」民族文化映像研究所

山田昌久 1997「移動生活のシステムと定住化」「道具・技術と居住のかたち」『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店

2000「 .通史編 3.後氷期の環境の多様化と定住化の工夫」『環境と人類』

朝倉書店

山本暉久 1995 「縄文人と貝塚」縄文時代集落の諸問題」日本考古学協会総大会発表要旨

山本典幸 1995 「御領ヶ台式土器様式期の季節的居住性 - 石器組成の民族誌学的解釈 - 」『先史考古学論集 4』

2000 「縄文時代の地域生活誌」『未完成考古学叢書』

湯沢町教育委員会 1986 「川久保遺跡」湯沢町教育委員会

1987 「萩野B遺跡」湯沢町教育委員会

1987 「川久保遺跡」湯沢町教育委員会

1989 「川久保遺跡」湯沢町教育委員会

1989 「川久保遺跡」湯沢町教育委員会

立教大学考古学研究会 1967 「大貝遺跡の調査」『新潟県新井市における考古学的調査』

立教大学考古学研究会

立教大学文学部考古学研究室 1966 「新潟県安田町ツベタ遺跡の調査」立教大学文学部考古学研究室

渡辺 仁 1990 「縄文式階層化社会」六興出版

渡辺 誠 1968 「西日本における縄文時代の網漁法について」物質文化 12

1984 「新潟県中魚沼郡津南町八反田遺跡発掘調査報告書」津南町教育委員会

会

1973 「縄文時代の漁業」雄山閣出版

1975 「縄文時代の植物食」雄山閣出版

図 1 石器組成のクラスター樹状図

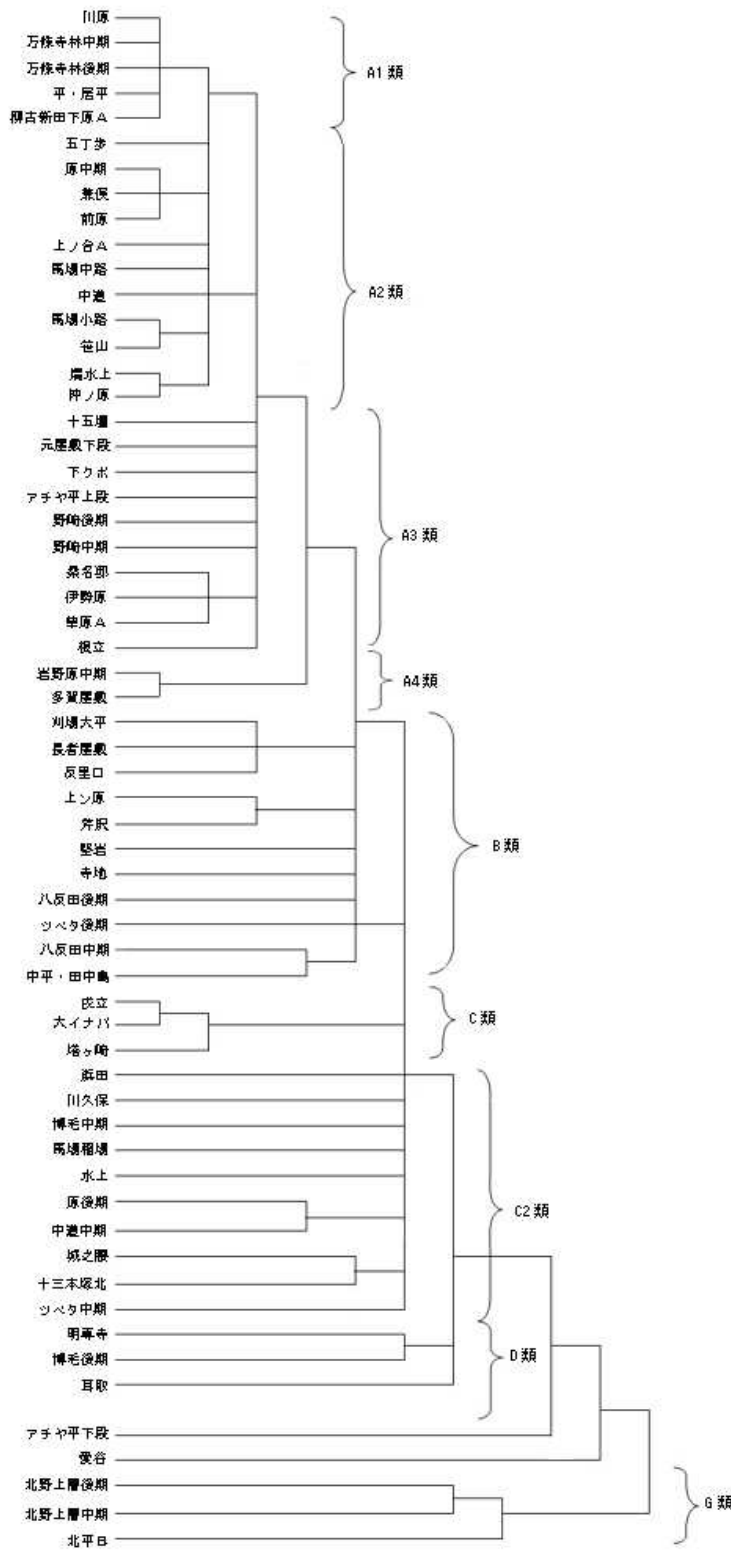
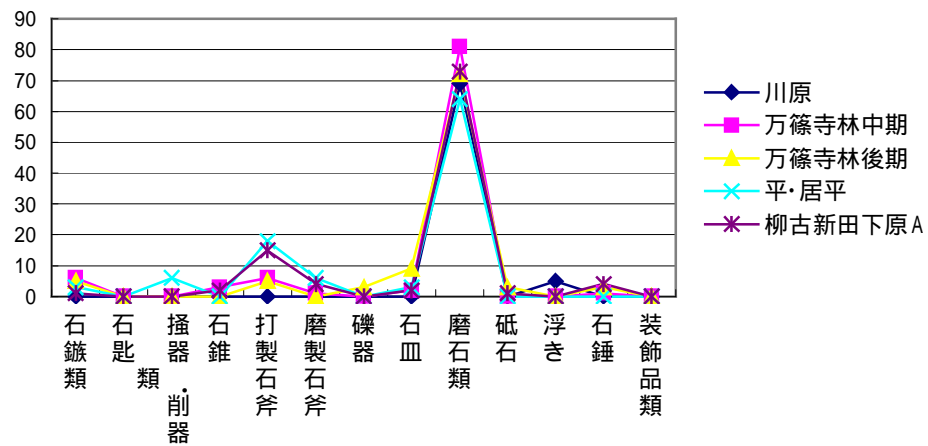
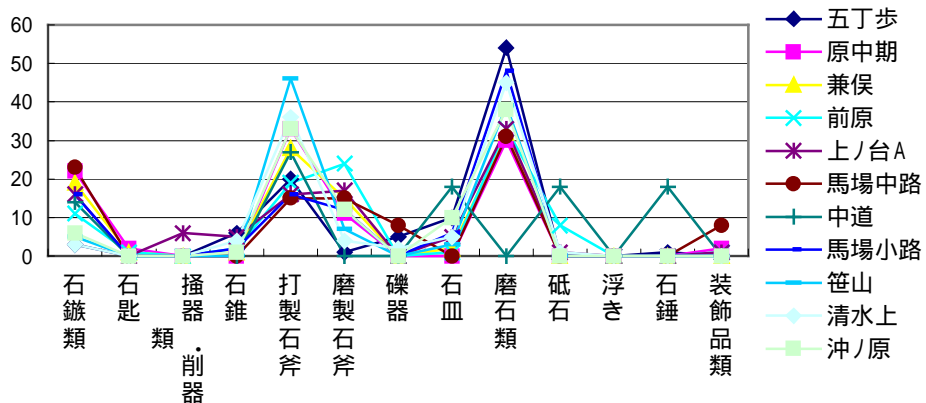


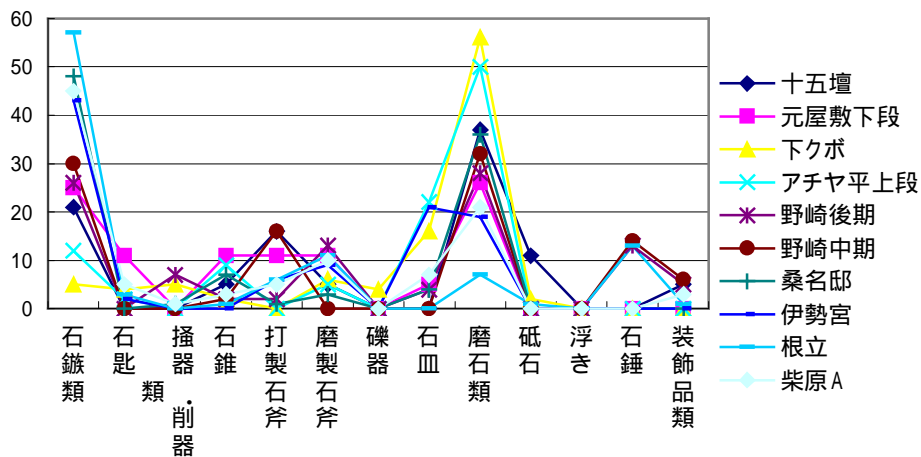
図 2 クラスターごとの石器組成パターン A1類



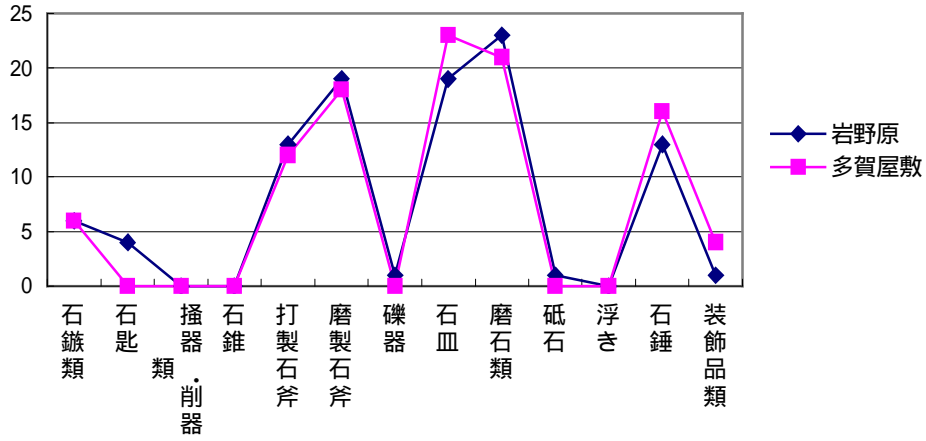
A2類



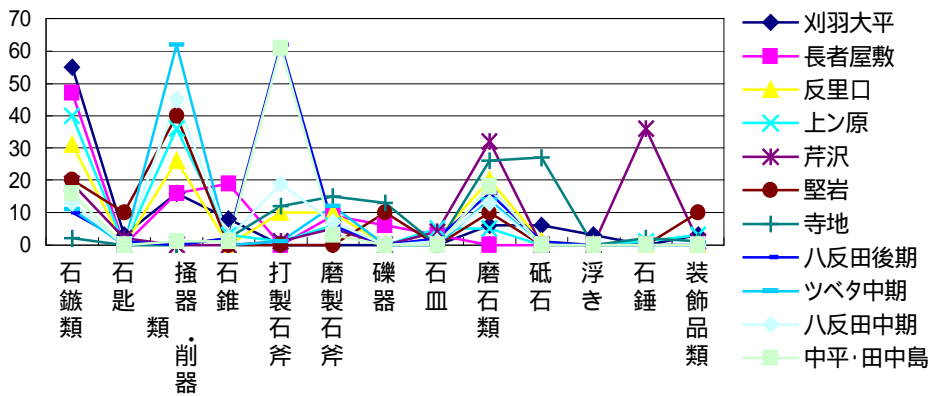
A3類



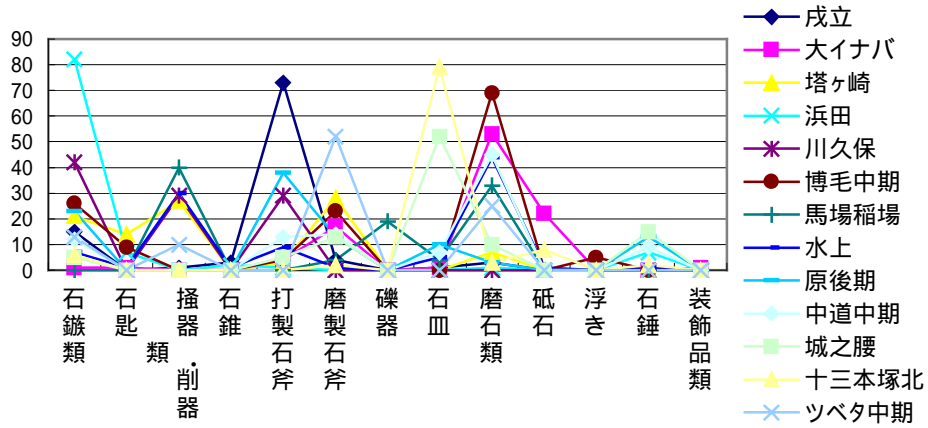
A4類



B類



C類



D ~ G類

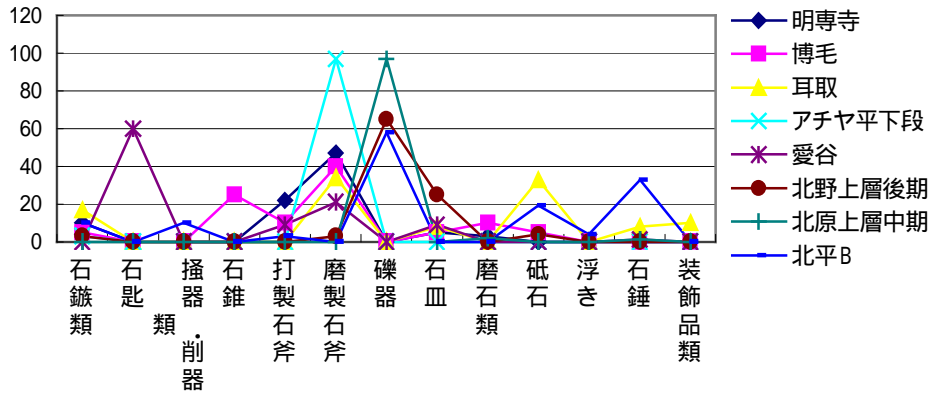


図 3 中期末葉～後期初頭のクラスター別遺跡数

クラスター別遺跡数

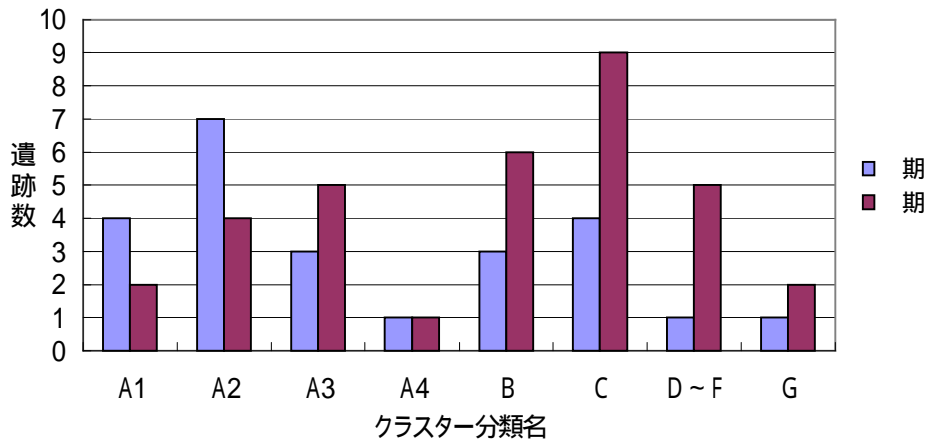
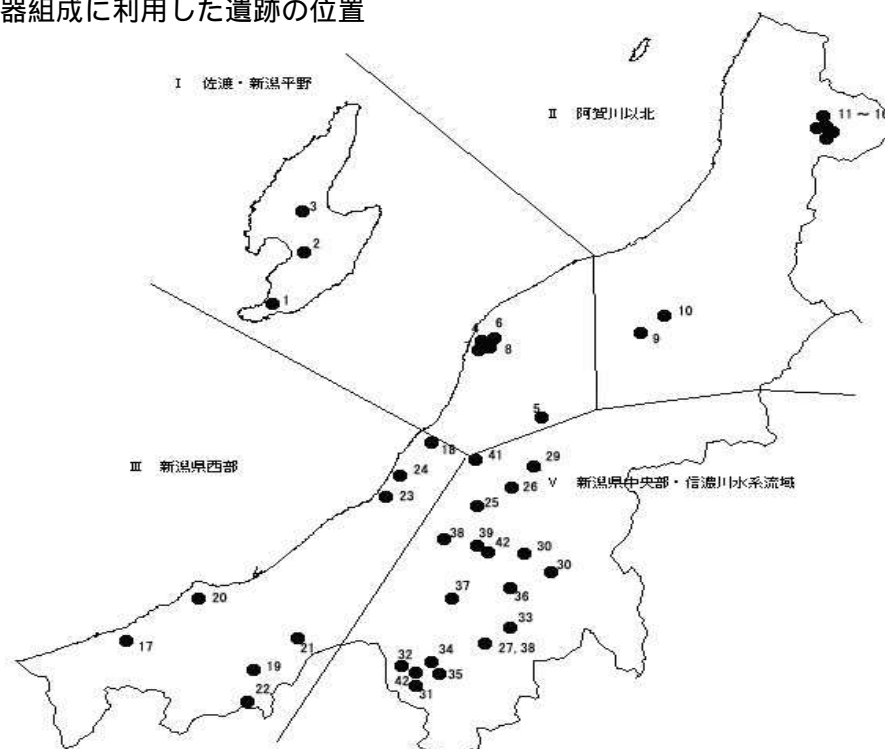
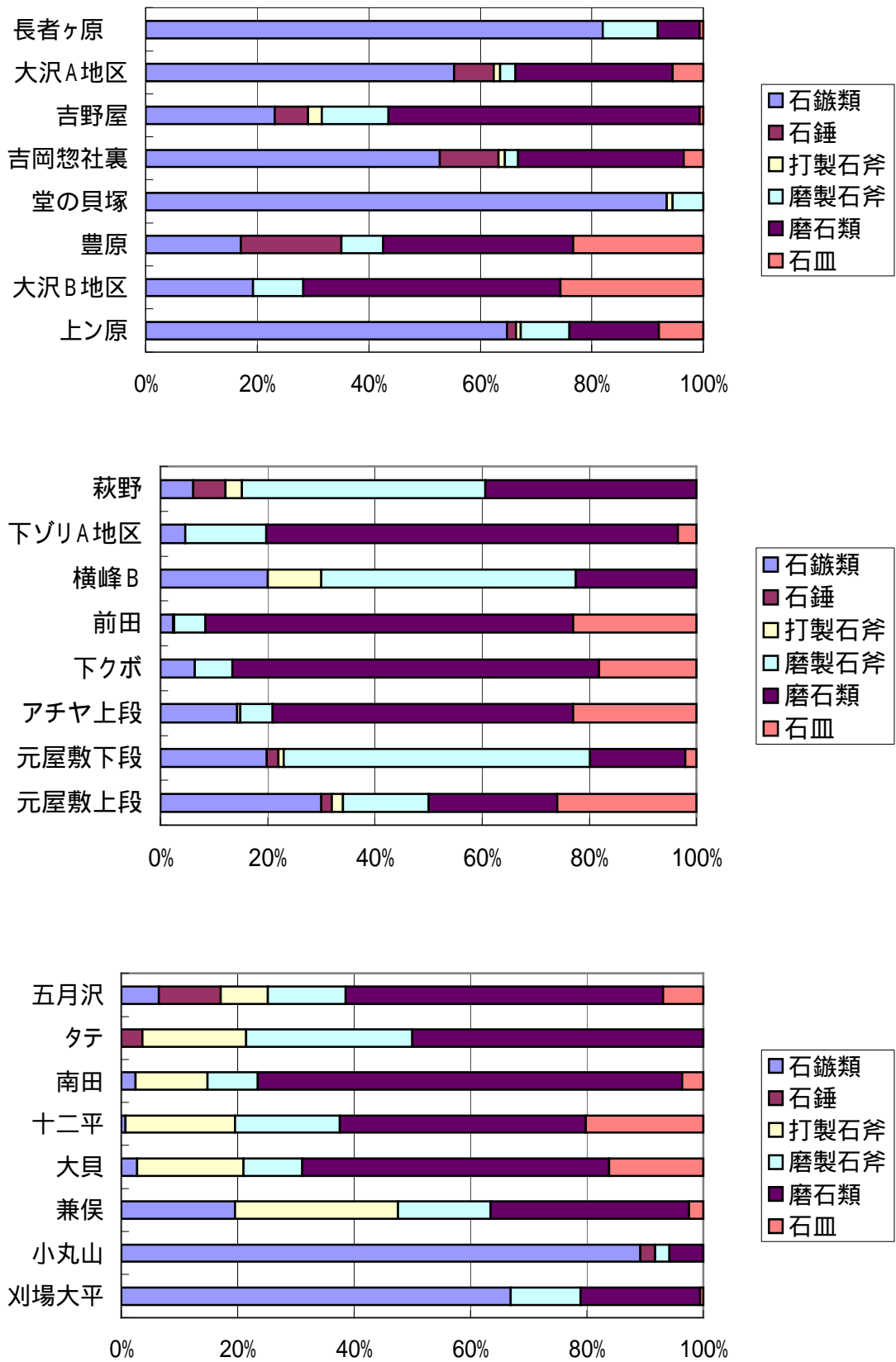


図 4 石器組成に利用した遺跡の位置



ブロック No.	遺跡名	時期	ブロック No.	遺跡名	時期
	長者ヶ原	前期末葉～中期初頭	22	小丸山	後期中葉
2	吉岡惣社裏	中期初頭	23	刈場大平	後期後葉
3	堂の貝塚	中期初頭～中葉	24	南原	中期初頭～後葉
4	大沢A地区	中期初頭～前葉	25	松葉	中期前葉～中葉
5	吉野屋	中期初頭	26	五丁歩	中期中葉
6	豊原	中期後葉	27	徳右エ門山	中期中葉
7	大沢B地区	後期初頭	28	栃倉	中期中葉
8	上ん原	後期前葉	29	清水上	中期中葉
9	萩野	中期前葉	30	沖ノ原	中期中葉～後葉
10	横峰B	中期中葉	31	八反田中期	中期中葉～後葉
11	下ソリA地区	中期前葉	32	宮下原	中期後葉
12	前田	中期中葉	33	森下	中期後葉
13	下クボ	中期末葉	34	反里口	中期末葉
14	アチャ上段	中期末葉～後期初頭	35	水上	中期後葉～後期初頭
15	元屋敷下段	後期前葉～後葉	36	笹山	中期前葉～後期前葉
16	元屋敷上段	後期初頭～	37	万條寺林	中期中葉～後期前葉
17	五月沢	中期初頭	38	城之腰	中期末葉～後期初頭
18	タテ	中期前葉	39	中道	中期末葉～後期初頭
19	南田	中期前葉	40	羽黒	中期中葉～後期中葉
20	十二平	中期中葉	41	八反田後期	後期初頭
21	大貝	中期後葉	42	柳古新田下原	後期初頭
22	兼俣	中期後葉～後期前葉			

図 5 地域毎の石器組成の変遷



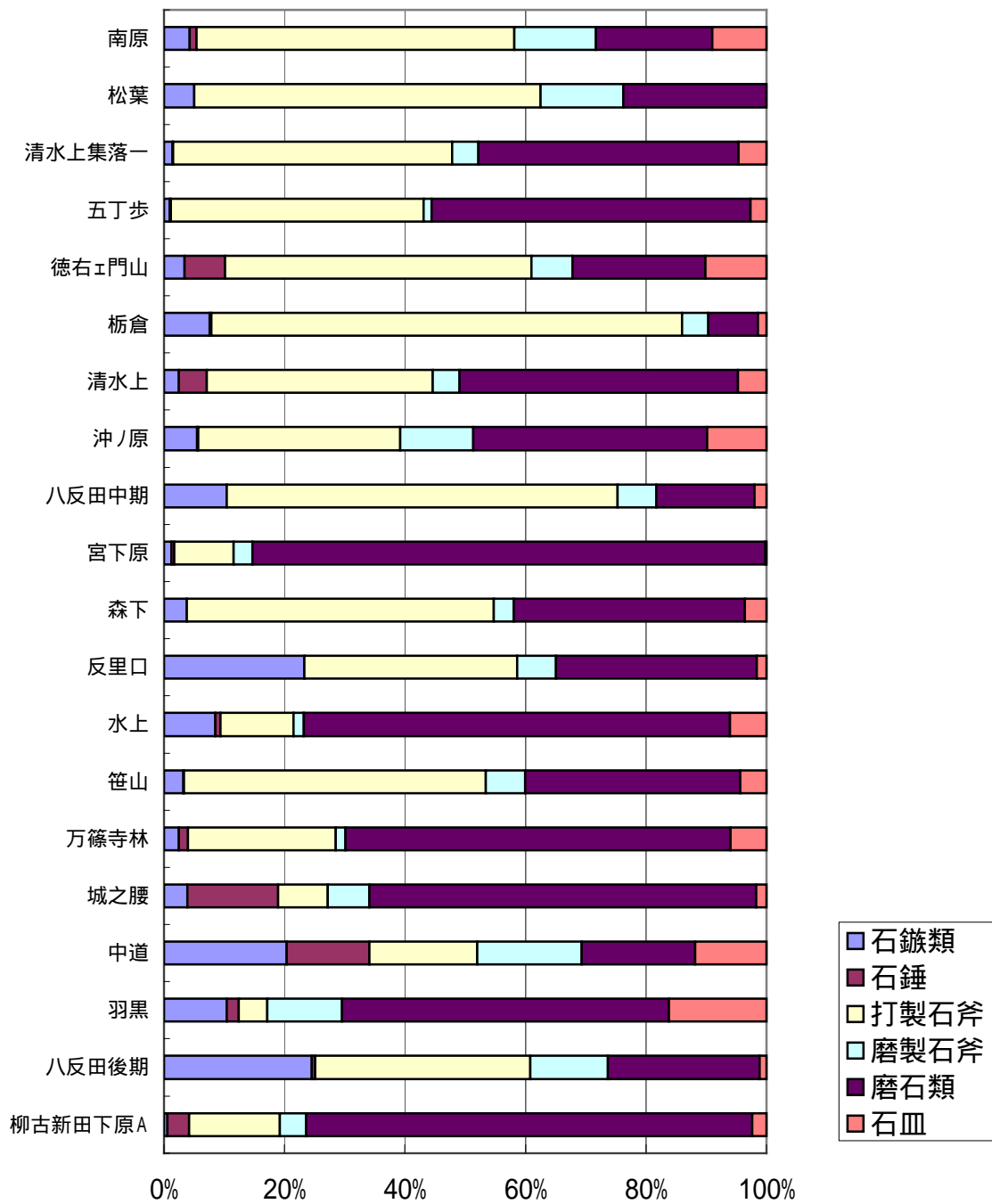


図 6 津南町・中里町を範囲とした遺跡数の増減

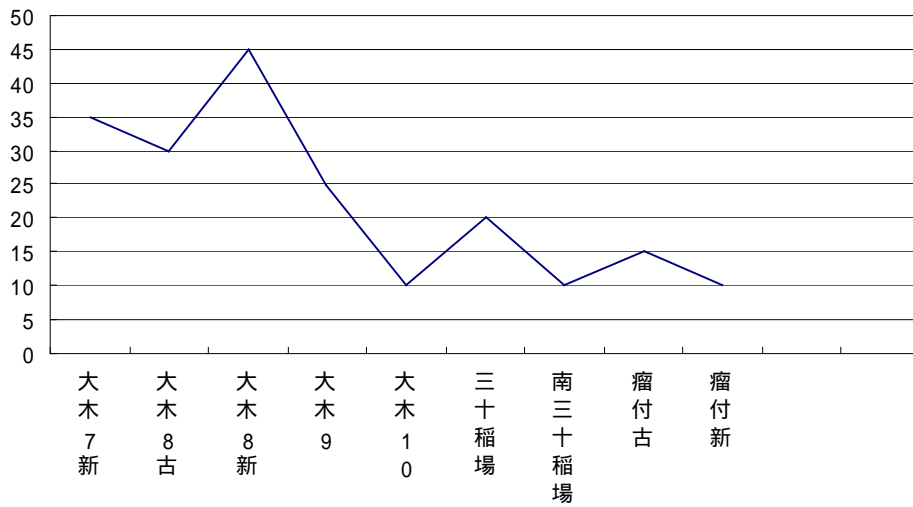


図 7 遺跡毎に見た板状石器の分類別個数

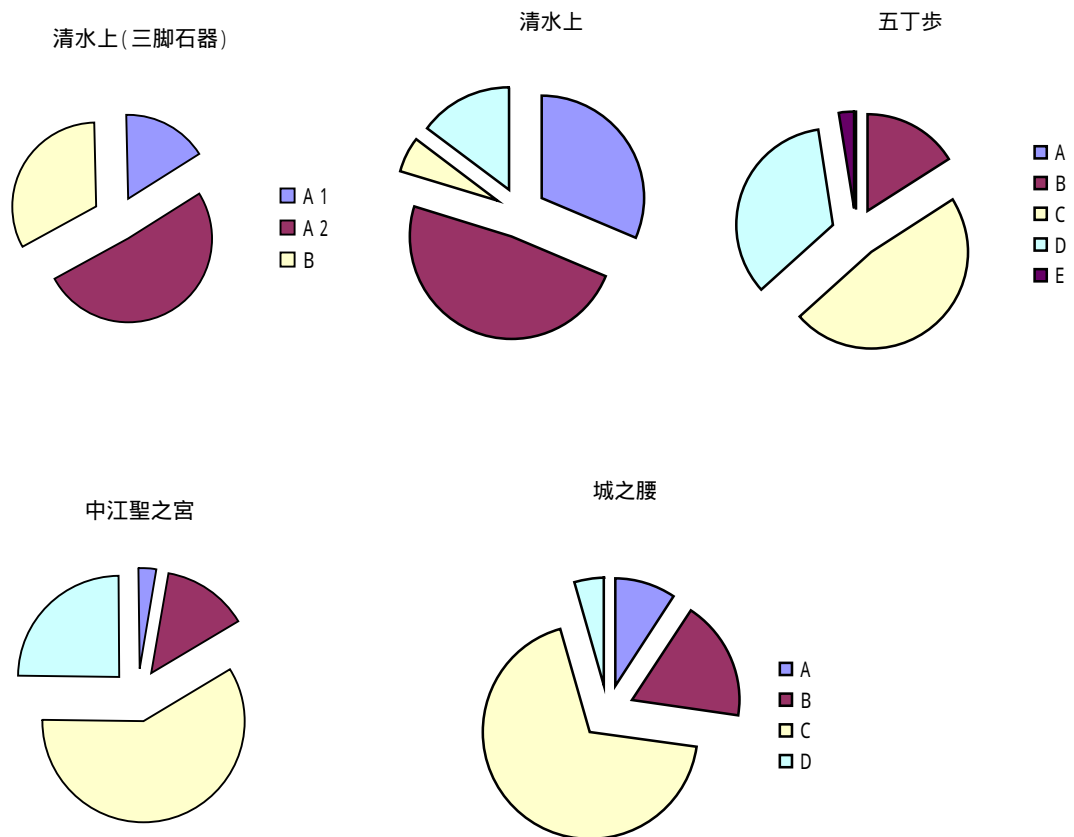
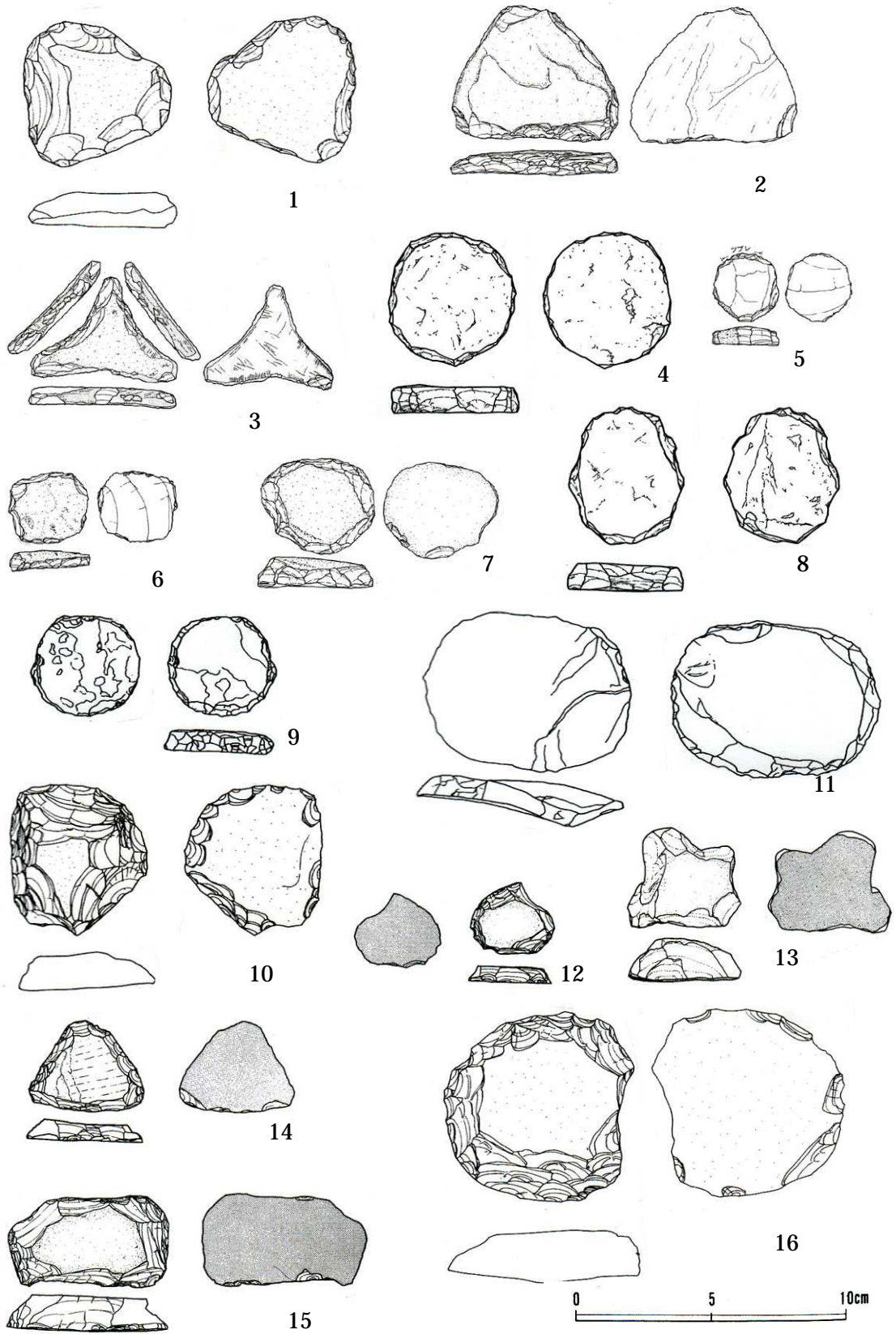


图 8 板状石器



(2~3、5~7 清水上 4、8 五丁步 9、11 中道 1、10、16 中江聖之宮 12~15 城之腰)

図 9 三脚石器と板状石器のセット図 田中(1990)より作成

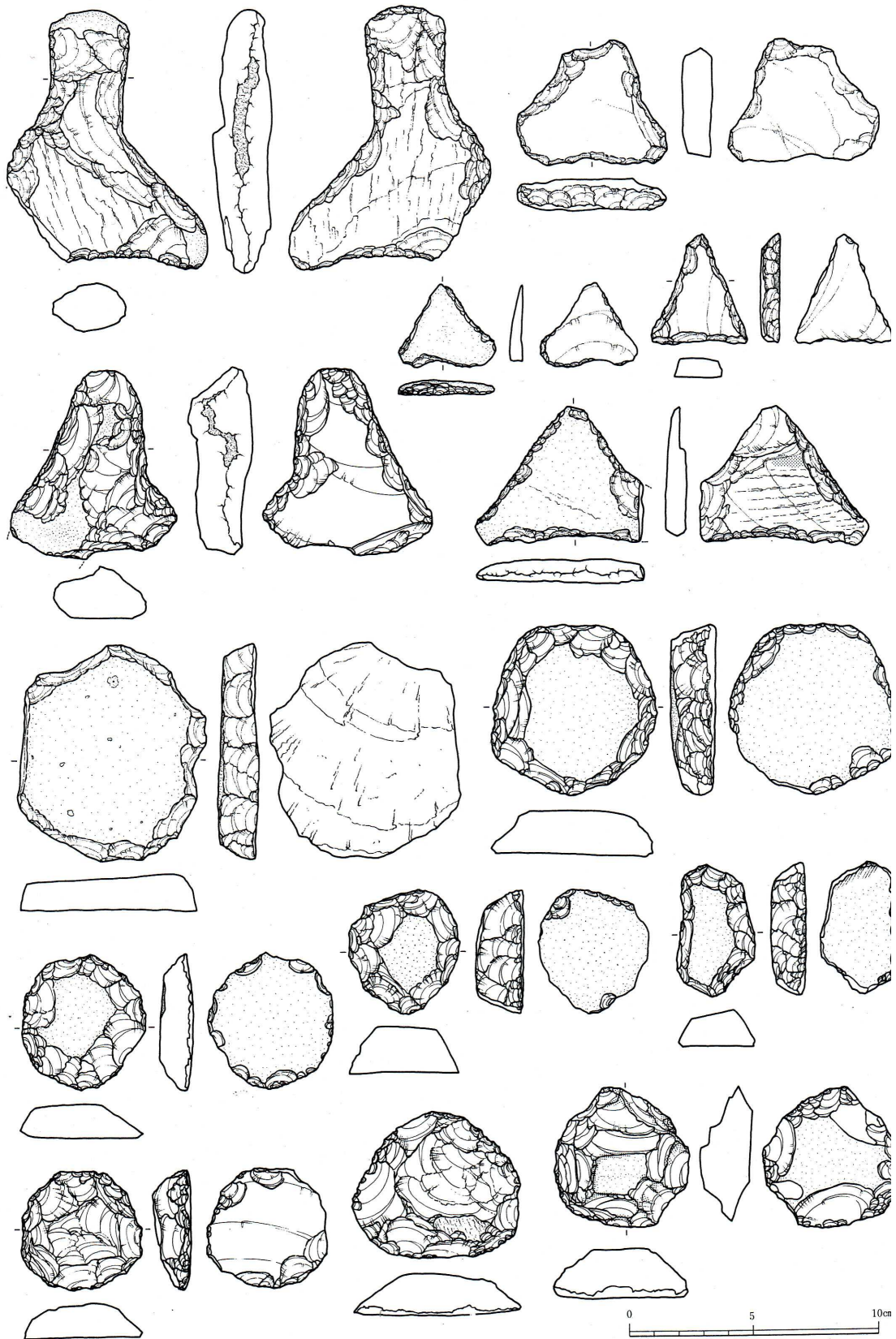
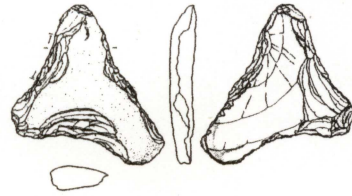
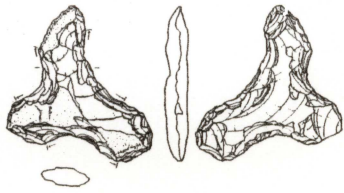
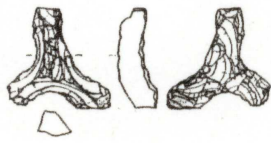


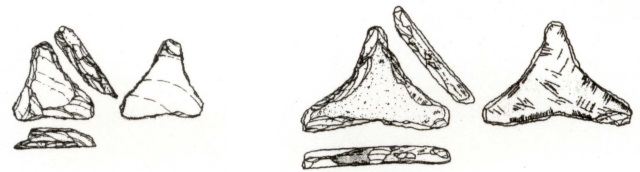
図 10 三角石器と板状石器の分類 鈴木（1990）より作成
三角石器 A1類



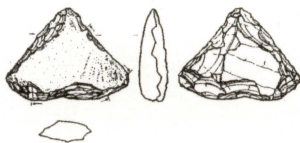
A2類



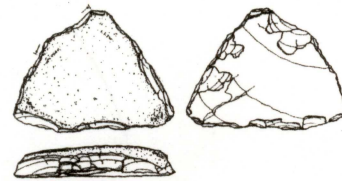
板状石器 A類



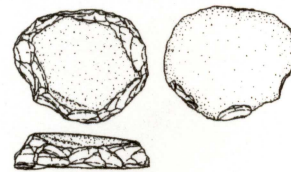
B類



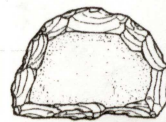
B類



C類

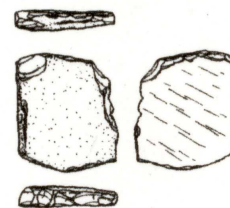


D1類



D類

D2類



E類

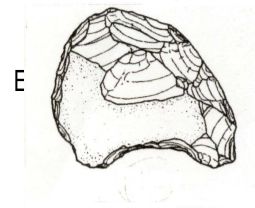
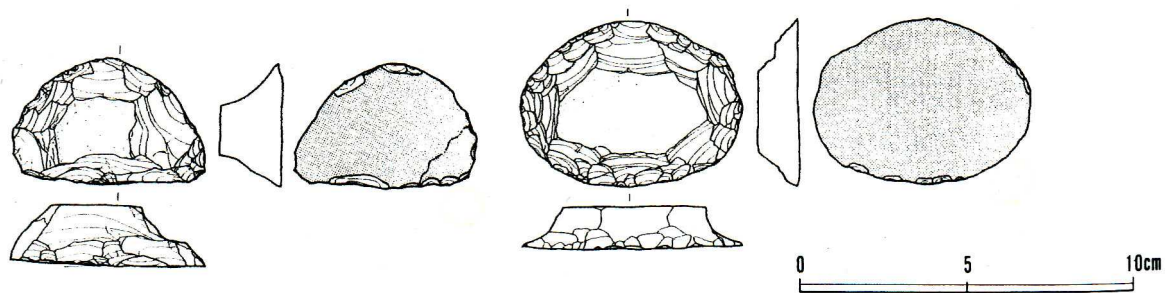


図 1 1 板状石器を保有する遺跡の石器組成

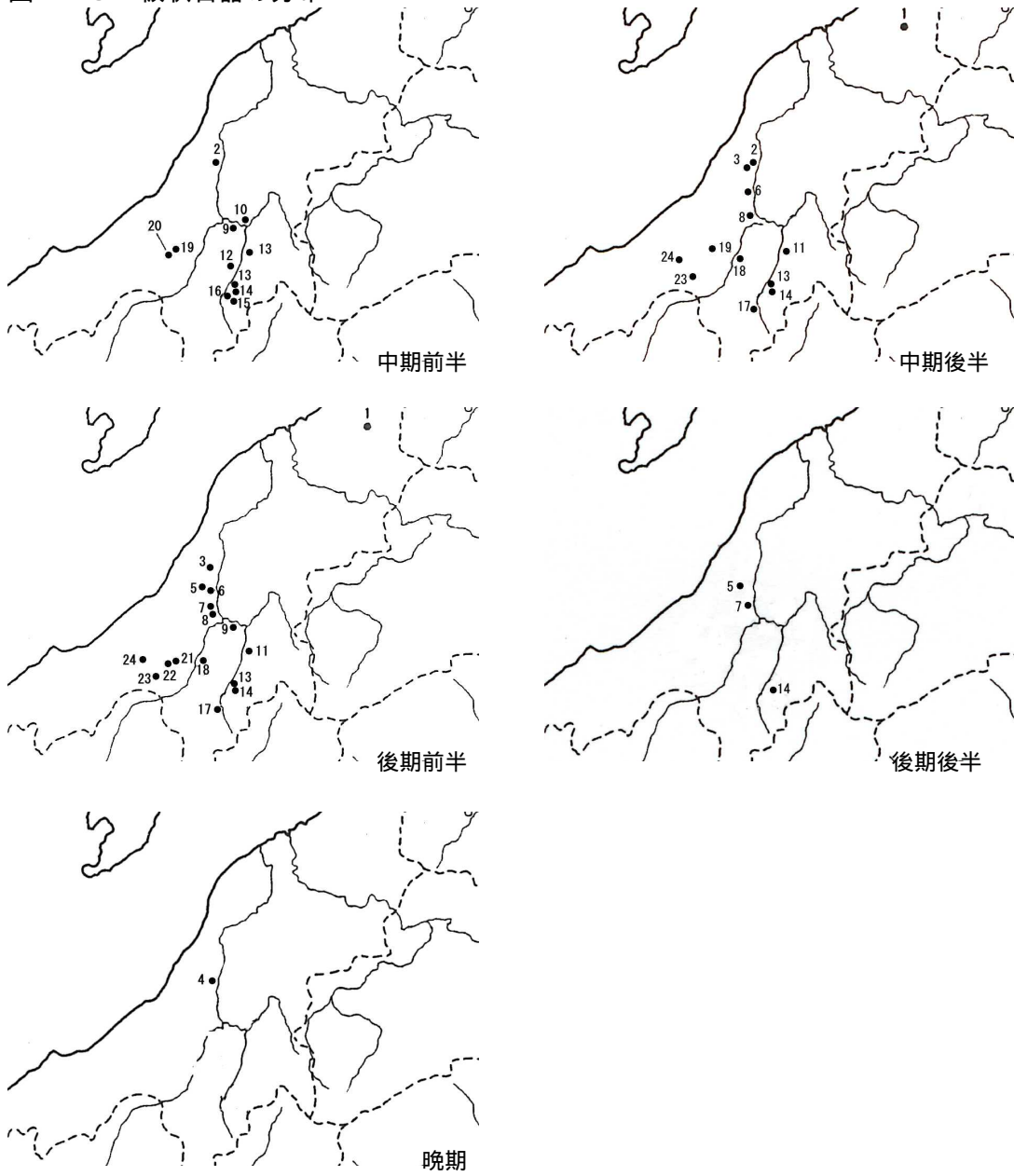
	石鏃類	石匙	搔器・削器	石錐	打製石斧	磨製石斧	礫器	石皿
万條寺林	25(2)	7(0.5)	152(12.5)	1(0.08)	251(20.0)	16(1.3)	0	61(5.0)
清水上	50(1.5)	4(0.1)	1275(41.6)	67(2.1)	594(19.4)	63(2.0)	44(1.4)	74(2.4)
五丁歩	22(0.6)	21(0.6)		68(1.8)	887(23.5)	36(1.0)	77(2.1)	56(1.5)
城之腰	179(3.1)	8(0.1)	337(5.3)	101(1.5)	373(5.8)	316(4.9)	99(1.5)	80(1.2)
笹山	102(3.6)	0	0	0	952(48.0)	145(6.2)	0	73(4.2)
森上	23(3.2)	0		12(1.7)	398(55.3)	20(2.8)	0	22(3.1)
中道	476(12.5)	21(0.7)	4(0.1)	52(1.4)	367(9.67)	405(10.6)	0	213(5.6)
	磨石類	砥石	石錘	装飾品類	三脚石器	板状石器		
万條寺林	654(54.1)	17(1.4)	20(1.3)	0	2(0.1)	6(0.4)		
清水上	642(20.9)	14(0.4)	2(0.06)	0	287(11)	474(17.2)		
五丁歩	1372(36.3)	241(6.4)	6(0.2)	0	3(0.1)	1034(27.3)		
城之腰	2928(46.1)	23(0.3)	670(10.8)	20(0.3)	11(0.1)	16(0.2)		
笹山	823(33.9)	0	0	0.6	6(0.25)	7(0.26)		
森上	232(32.2)	0	0	2(0.3)	4(0.6)	1(0.15)		
中道	1829(53.0)	48(1.3)	245(6.4)	51(1.4)	3(0.1)	21(0.6)		

図 1 2 断面が帽子形を採る板状石器



高橋(1992)より作成

図 13 板状石器の分布



1	北平B	11	柳古新田下原A	21	大久保
2	馬高	12	上ノ台	22	向原
3	三十稻場	13	万條寺林	23	深田
4	藤橋	14	大原	24	下村A
5	岩野原	15	原		
6	上並松	16	五丁歩		
7	三仏生	17	川久保		
8	城之腰	18	笹山		
9	布場平	19	林中		
10	清水上	20	上小原		

図 14 信濃川中・上流域の拠点集落と礫石錘 (高橋(1992)を加筆修正)

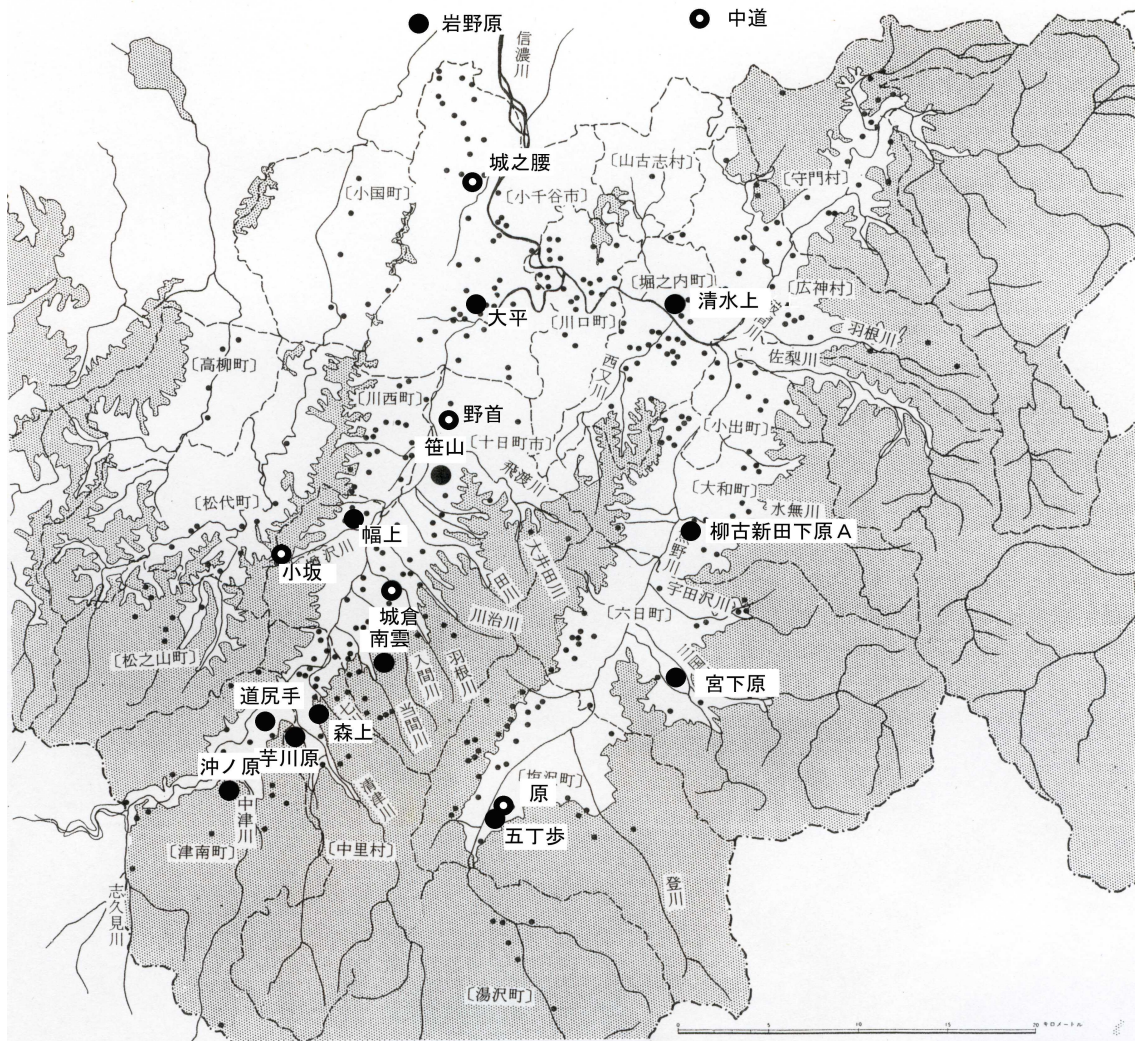


図 15 三脚石器・板状石器と礫石錘の在り方

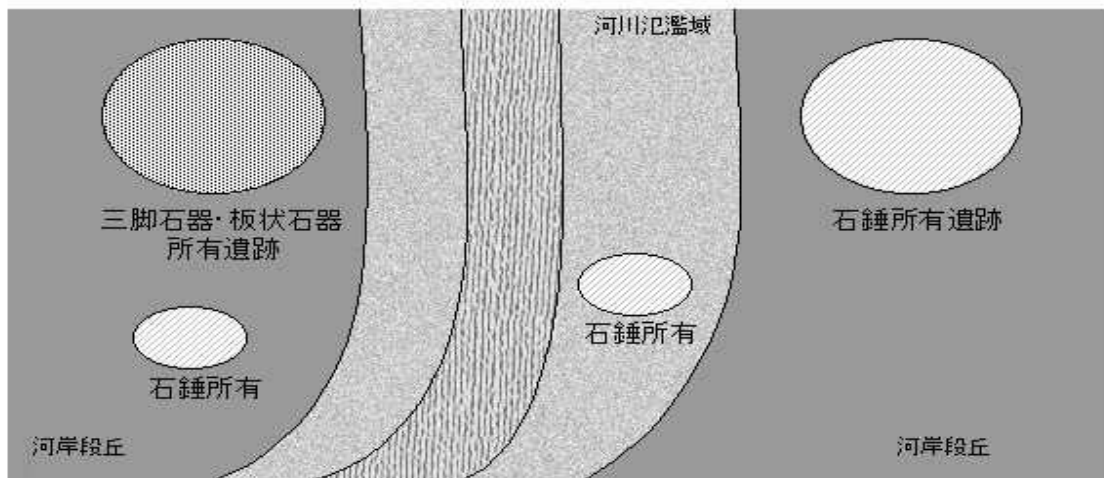
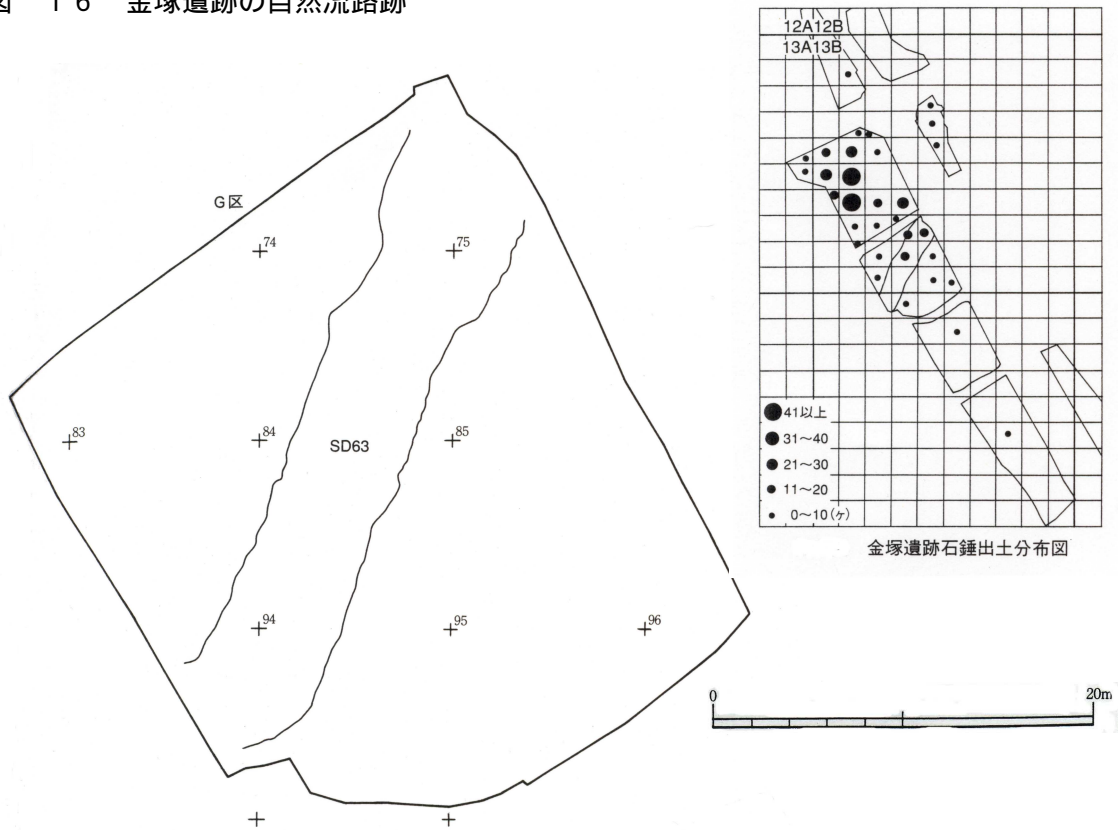
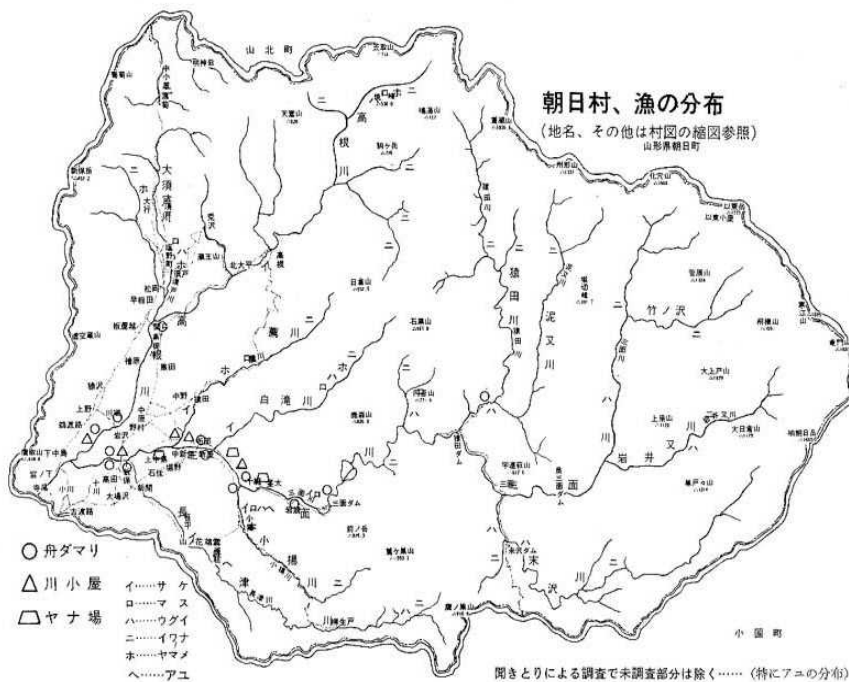


図 16 金塚遺跡の自然流路跡



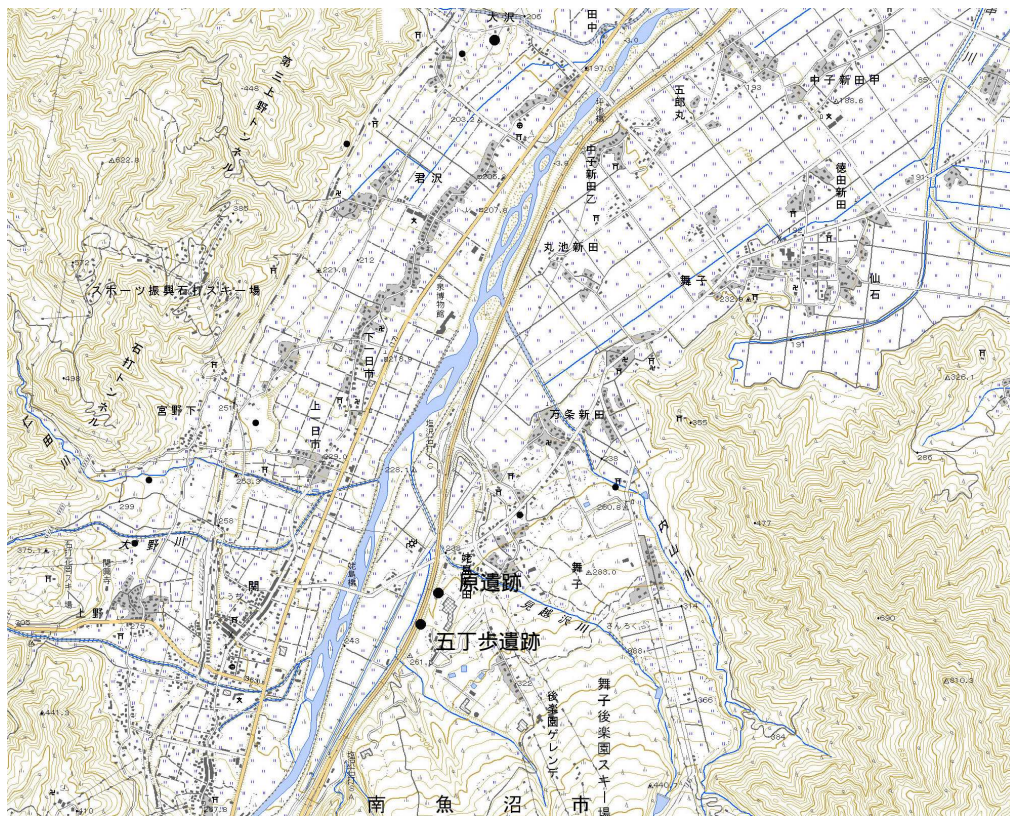
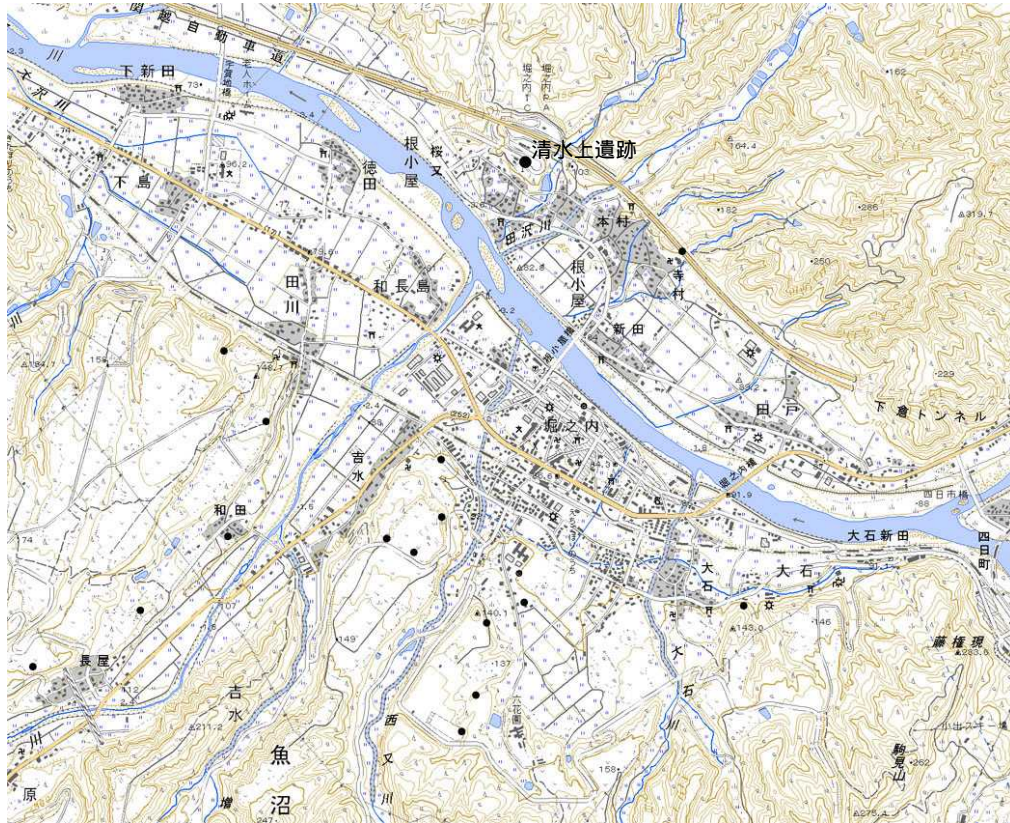
新潟県教育委員会（1999）より引用

図 17 奥三面の漁場



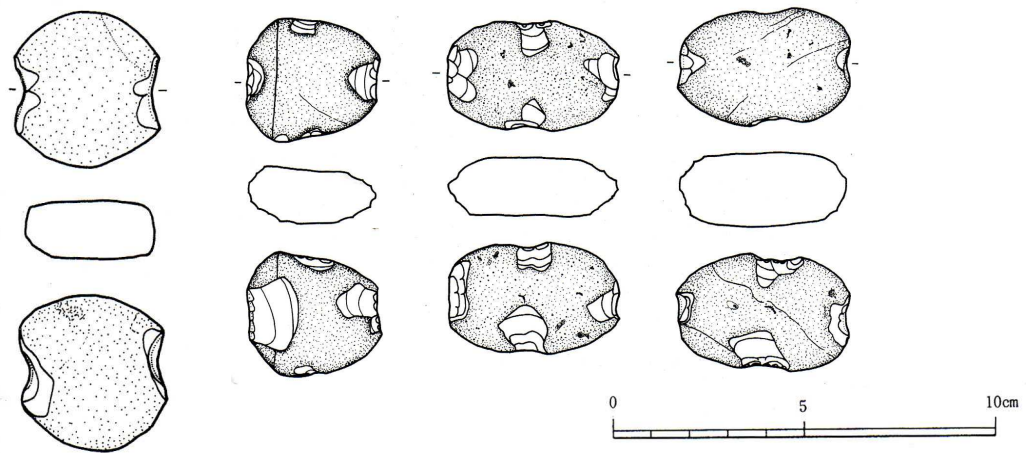
朝日村教育委員会（1999）より引用

図 18 清水上遺跡・五丁歩遺跡周辺の小規模遺跡



(1/45000)

図 19 敲打石錘（左）と十字に縄かけ部を有する礫石錘（右）



新潟県教育委員会（1991）より作成

図 20 季節的移動と板状石器・礫石錘

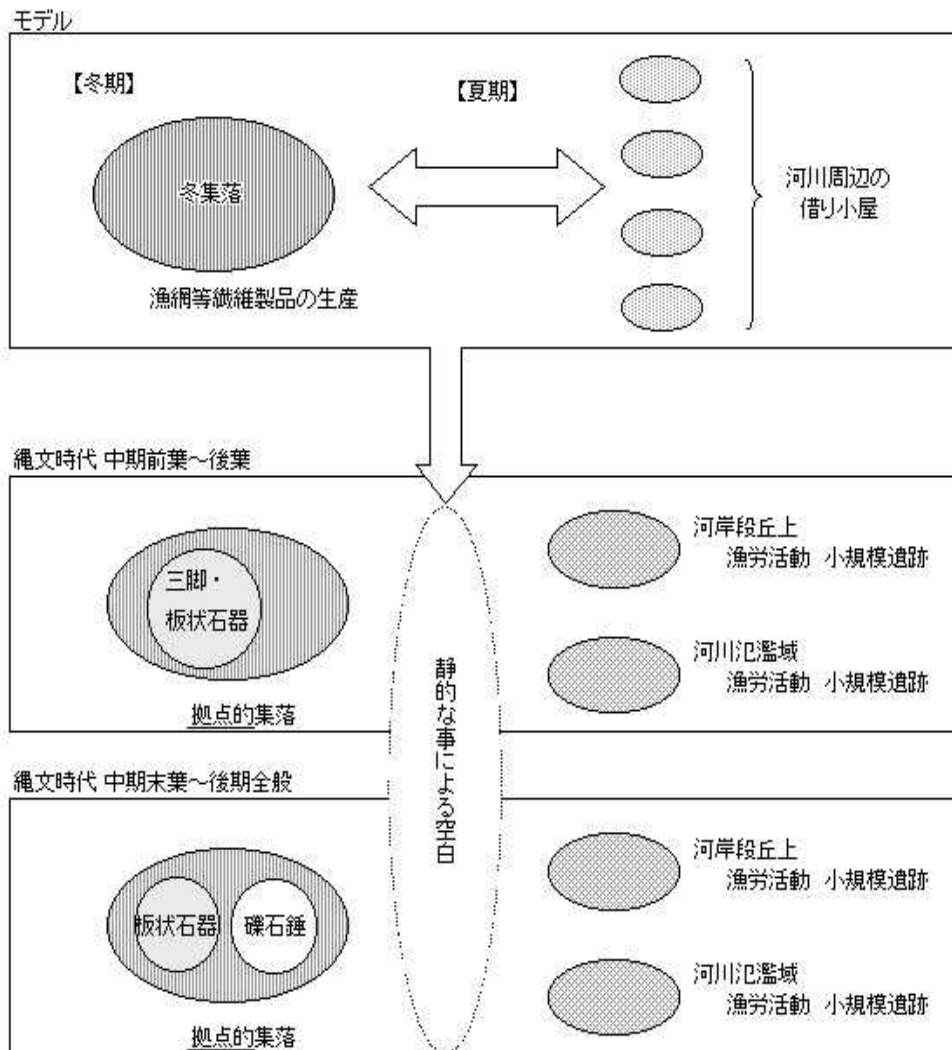
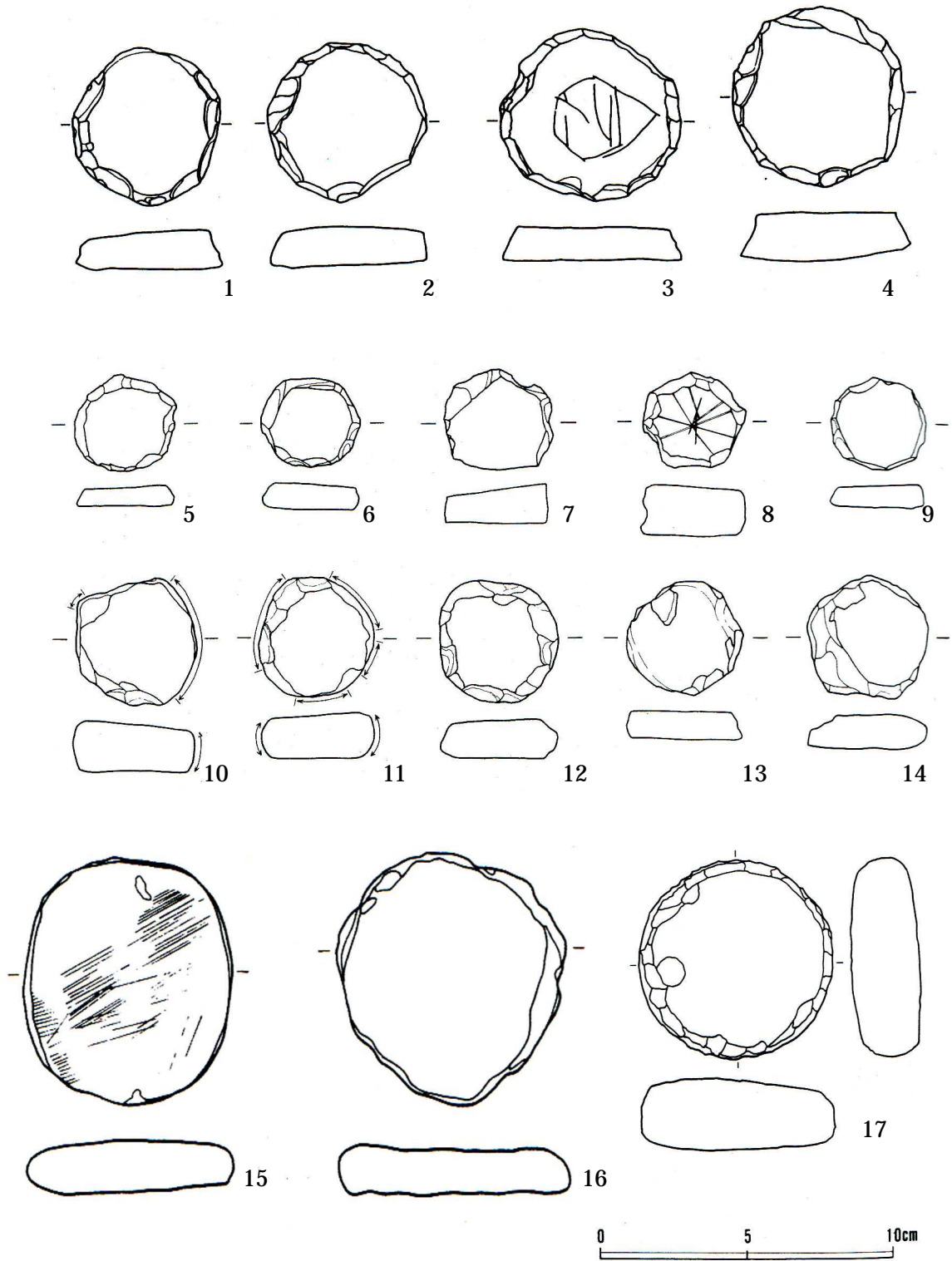


図 21 板状石器と類似する石器



(1~4 上ノ台 5~14、17 手代森 15~16 八木)